夢の世界の王様　～夢食いメリー×仮面ライダーキバ～

ダークボール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢の世界の王様　～夢食いメリー×仮面ライダーキバ～

【Ｎコード】
Ｎ１９５０Ｓ

【作者名】
ダークボール

【あらすじ】
ギル・モナークの野望を打ち砕き、平和となった世界を生活し続けていた人間界の青年、琴芭（ことは）　英次（えいじ）。
しかし彼に新たな危機が…なんと英次が魔王に！？これは一体どういうことなのか？そのカギを握るのは、夢喰いの名を持つ少女！？
さてさて、こんな王様がはたしてどのような物語を刻んでいくのか、はたまた魔王の覚醒を阻止できるのか。ハラハラドキドキ、愉快痛快なアドベンチャーが今ここに始まります！

Ｃｈａｐｔｅｒ００：始まりは夢の中で（前書き）

Ｑ：な　ぜ　作　っ　た　し

Ａ：出来心なんです！作りたいという欲望がグリ…ゲフンゲフン、ようつべで動いてしまった結果でこうなったんです！後悔はしていない！

Ｑ：恥、かかないよな？

Ａ：滅相もありません！だがこれをどう維持するかが作者なので、とにかくやるしか方法が…

とりあえず、見てくださっている方の為にもやります！そればプロローグ、はーじまーるよー。

Ｃｈａｐｔｅｒ００：始まりは夢の中で

この世は２つの存在で対立している。

１つは我々のようなごく普通の者が住み、
もう１つは誰も信じることが無い幻想の者…。

人間の世界で悪事を働いていた反ファンガイア抵抗軍を率いる皇帝、
ギル・モナークの戦いから数日後に共存条約を結び、２つの世界に
平和と安心が保立てられていた頃、
人間界の王、琴芭（ことは）　英次（えいじ）は平和な街を見守りながら生活をしていた
ある日のことから、その物語が始まろうとしていた。

それはまさしく、夢のようでありながら、彼だけしか知らない物語。
果たして彼にどんなことが待っているのだろうか？その話をこれか
ら聞いて行こうではないだろうか…。

【夢の世界の王様　～夢食いメリー×仮面ライダーキバ～】

「うぁぁぁぁ……うぁぁぁぁぁぁ……！」

何処からか呻き声が聞こえる。
俺はそんな声を聞いて目を開けると、そこは燃え盛る街並みの風景だった。
どういうことだ…俺は仲間と一緒にギル・モナークを打ち破って平和を取り戻したはずなのに…。

「うぁぁぁぁぁぁ…！うぁぁぁぁぁぁ…！」

声がだんだん聞こえてくる。あの声は何なんだろうか…と思うが、俺かなぜか疑った。
アレは…俺の声…？
何でおれの声がするのだろうか…。とにかく行ってみるか。

炎を避けて向かった先に見えていたのは、俺では言葉にできない光景だった。
寧ろ、これが現実だったら普通は握りつぶされるくらいの感覚を得るだろう。

「英次君、魔王なんかに取りつかれちゃダメだ！」
「ウアアアアアアアアアアアアッ！！！」

そこで見たのは、紛れもない俺と黒い蝙蝠の姿をした者、俺はそいつを仮面ライダーダークキバと呼んでおり、その中身は俺と同じ王のソフィードだ。
だがなんだアレは！？なんで俺があんな姿に！！

「ソフィード、もはや彼は助からん。こうなった以上に、魔王が完全と化すまでに彼を殺さなければ全てを消されてしまうぞ」
「でも僕は…僕はそんなことできないよ…！」
「分かってくれ。俺の息子も、あいつにやられてしまったんだ…」

えっ、息子ってまさか…。
ベルトのバックル部分にいる黒い蝙蝠、キバットバット？世の言葉に俺は凍りついた。息子とはその名の通り、？世の息子であるキバットバット？世だが、やられたというのはつまり殺されたということ。
俺が、キバットを殺した…！？
なんでだよ！！俺はそんなことしないぞ！？
「ウアアアアアアアアアアアッ！！」

その時にもう1人の俺に強いさっきが現れると同時に強い力が全体へ放出した。
まるで爆発したような圧力に俺は吹き飛ばされてしまい、ソフィードは手に持っていた剣で地面を差して耐えていた。

「いかん！このままでは覚醒してしまう！急ぐんだソフィード！」
「ぼ、僕は…僕は……うわあああああぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！」

ソフィードは吠えながらも一人の俺に突き付けた直後、まばゆい光と同時に爆発が発生した。
そして俺は…

「―っ！！？」

俺は変な場所で目覚めた。
なんだがゲームでありそうな空間だった。

「何処だここ…」
「目が覚めたか、人間界の王」

その声に俺が振り向くと、虚ろな目に水色の髪形をした青年を発見する。

「今お前が見たのはお前の未来の姿であり、夢だ」
「夢…？」
未来の姿であって夢ってなんのことやら…それよりこいつは誰なんだ？新手の敵か？
「名前を言っていなかったが俺はアークス。２つ名は予知夢（デジャウ）だ」
「予知夢？確か、未来に起こる夢のことだよな？」
「飲み込みが早いな。そうだ、俺の能力の１つ、対象の者の未来の様子を夢で現せれる」
アークスは俺へさらりと説明すると、気を取り直したかのようにして別の話を始める。
「ここはお前の夢の中だ。目を覚ませば元の世界に戻ることができるが、その前に言っておきたいことがある。それはお前の体に取りついている魂のことだ」
「俺の体に…？それがあの予知夢とどういう関係が…」
「分かることだが、琴芭英次。お前はもうすぐ、存在が消えてしまうことになっているのだ。魔王の覚醒で体を乗っ取られて消えてしまうことに…」
「…はい…？」
なにこれ？いきなりピンチって奴？
「急に飲み込みにくくなったんだけど、俺は今ヤバいことになってることなのか！？」
「そうだ」
「じゃあ何故取りつかれて…？」
「そこにある理由がある。それはお前が毎回変身に用いているキバ

ットからだ」
「え！？キバットが…？」
相棒に大きなかかわりがあることに驚いてしまった。
「そもそもキバとは闇属性で作られた鎧だ。魔王はこの属性を逆利用して生まれてしまい、今までに力を蓄えながら成長を続けていた。お前の体でだ」
「そんな、まさか…じゃあこの魂を取り除くことはできないのか！？方法があるはず…」
これでないのだったら俺はどうしようもなく絶句するに違いない。だが…
「方法ならある。夢食いの名を持つ者に会うのだ」
意外と方法があった。好都合で何よりである。
「夢食い？つまり、この悪い夢を食ってもらえってこと？」
「とはいえ、彼女は記憶もなく力も足りていないがこれだけは言っておく。これからお前は彼女と会って、魔王を取り除いてもらうのだ」
それはいい方法じゃない！まるっきし分かりませんと言ってるようなことじゃないか！
「というより、さっきから彼女って…その夢食いって奴は女か？」
「そうだ。名は…メリー・ナイトメアと名乗っていたか、見た目はお前も分かるはずだ」

うーん、夢食いの２つ名を持つ少女メリーか…。ってかこの展開はもうスタートの予感が…。

「今度は俺から言わせてくれ、お前は何で俺の名を？」
「さぁ？」
「じゃあ、お前は何者だ？」
「さっき名前を言ったのを忘れたのか？」
…前言撤回。こいつは死刑だ＃

そう言って俺は殴ろうとしたその時、アークスの姿が消えてしまう。そして彼の声がこだました。

「ともかくだ英次。これからお前は彼女のいる世界へ行き、会うことをお前の第一目的として与える。では、健闘を祈っている」
「ちょ、おまっ、待てやオイッ！！」

しかし俺はそこで途絶えてしまい、気が付けばなぜか街中に立っていた。（しかも愛用のマシンキバーに跨りながら）
よく見る度自分の服装が何やら学生服。時間帯では朝なので登校のつもり、そして何より、これから向かう先の生徒手帳までもが握られていた。

「…六花高校？なるほど、メリーはこの学校に通ってるってことだな？」

何だよおい、居場所まで教えてくれるなら最初からそう言えよ。
俺はそう言いつつマシンキバーで目指す高校へと向かった。

「…って、高校の場所はどうなんだ！？」

俺は仕方なく聞き込みをしながらで向かうこととなったのである。

Ｃｈａｐｔｅｒ００：始まりは夢の中で（後書き）

いかがですかな？コレが遅くなって投稿される場合もございますので、そこは大目に見てください。
どうかエールをくれるだけでも幸いなので、どうかよろしくお願いします。
因みにこのストーリーではアニメ通りな進み具合ですけど、場合によればちょっと変わったりもしますので…

Ｃｈａｐｔｅｒ０１：電車の中での出会い

朝の駅では会社へ行くサラリーマンに紛れて学校へ行く生徒もいる。
そんな毎日が続いているが、時にはこういうことだってあるものだ。

【ピーッ】

「んおっ！？」

茶髪の髪色で跳ね上がったアホ毛を立たせている男子生徒が定期券を入れたパスをセタッチするが、どうも定期切れの様子でドアが閉ざされてしまう。

「どうしたの、夢路（ゆめじ）？」

既に改札口を通っていた水色の髪色をした女子生徒が彼に振り返る。

「ああわりぃ、定期切れてた。ちょっと切符買ってくる」

夢路は切符売場へ急いで買いに向かって行ったが、そんな彼女はムスッとした顔になって言った。

「んもぉ…だから早めに更新しなさいって言ったのに…」

どうやら夢路の忘れ事が今回の結果を招いたもようである。
すると後ろから元気そうな女の子の声がしたことに振り向くと、文字通りに活発でもある茶髪の女子生徒と、クールな金髪の男子生徒

の2人がそこに立っており、茶髪の女子生徒はからかうような顔でいた。

「お～お、世話焼き女房も大変ですなぁ」

「あ、おはよう咲(さき)ちゃん、秋柳(あきやなぎ)君…って、誰が世話焼き女房よ！？」

挨拶はしたものの、どうも世話焼きという言葉に顔を赤くして言い返すのだが咲曰く、「幼馴染と屋根の下で暮らしている」とのことでだが、夢路は彼女の家で下宿していることからそういう関係らしい。

すると秋柳は筆と紙を取り出しながら、川柳を一句読み上げるのであった。

「『橘さん、怒っているけど、いと嬉し』秋柳　貴照…」

「秋柳君まで…」

完全にからかわれたと思っていると、ちょうど切符を買って改札口を通ってきた夢路が彼女の後ろへやってくる。

「いや～わりぃわりぃ…あれ？勇魚、なに真っ赤になってんだ？」

「（ドキッ）　も、もう知らないっ！」

勇魚は夢路達とは別の方向へ移動してその場から離れると、これから彼らが乗る電車が風と共に滑り込んでくる。

停車したところで扉は開き、夢路達は電車に乗り込もうとした後で発車の音声が鳴りやむその時だった。改札口から急ぎ足でやってくる男子生徒が現れ、扉が閉まる前に駆け込みながらで乗車した直後に扉が閉まる。

「ハァ…ハァ……間に合った…」

男子生徒は息を切らして息を吸いもどした後、背筋を伸ばしてどこかの席に座ろうと辺りを見回した。
しかしよく見るとその生徒は、六花高校へ向かっている途中だった琴芭　英次だということを最初に言っておくとしよう。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

六花高校へ向かうには電車で向かうのが良いとのことで俺はこの交通手段を利用することに決めていた。
もともとバイクの運転は高校を卒業した時のみなので、それを勝手に運転しながらの投稿は校則違反。そこで電車を使うことにしたのだが、バイクはどうするのかと思うけどその心配はない。マシンキバーは無人走行が可能なのでいざというときに駆け付けに来てくれる頼もしいバイクなのだ。
俺は駅に到着するとバイクのエンジンを切り、パチンと指を鳴らして誰も気づかれないようにマシンキバーを透明化させる。因みに高これは魔皇力と呼ばれるファンガイアの力であり、人間である俺には強い力を持っている。いわゆる超能力とかではなく、魔法が使えると言った方が正論だろう。
さて、切符を買ってすぐにホームへ行くか…と思って切符を買ったのはよかったのだが、大変なことがこのあと起きてしまうのであった。

【プルルルルル】

「ゲッ！？」

ヤバい！電車が発車してしまう！

俺は急いで改札口を通過して電車へ駆け込んだ。

バタンッ

「ハァ…ハァ……間に合った…」

危ねぇ、ギリギリセーフだ。

危く遅刻になってしまうところだったが、まさか発車寸前とは予想もしてなかった。次回は時刻表でも見ながら時間を見ておいた方がいいだろう…。

と、俺は気を取り直して周りを見回した。できるならいい席で座ろうとしていたがどうも空いておらず、吊革につかまってるかと思って移動しようとしたその時だ。ちょうど俺が前を見ていた時に六花高校の生徒を見かける。

まず1人目は茶髪でアンテナみたいに立っているアホ毛をした男子、2人目は水色の髪でツインのおさげをした女子、3人目はここですぐに会話でもするような元気ある女子、そして4人目はクールで金髪の男子。この4人は間違いなく俺が向かう高校の生徒だと、俺はそう考えてあとに4人のいる席まで近づいた。

「ん？」

その時、3人目の生徒が俺に気づいて顔を向いてきた。

気づかれるの早いなぁ…とは言う間もなくその生徒が話しかけてきた。

「見かけない顔だねぇ。もしかして、転入生かい？」

「え？」

なぜ分かったし。

「いや～、今日から新しく来る生徒がいるって聞いたから、もしかして君かなって思ってさ」

「えっ、そうなの？でもそれって、別の生徒じゃ？」

1人目の生徒が違うだろうと言うが、俺はこの際に言うべきだとのことで言うことにした。

「確かにそうだよ。俺は今日から六花高校に通う転入生さ」

「おお、やっぱり！私は霧島（きりしま）　咲（さき）、文芸部員所属の高校2年よ」

おい待て、これはもう自己紹介してくれとでもいう展開かどうも早すぎるだろ。

「せっかくだし、サナも言ってあげたらどう？」

「えっ、私？」

2人目の生徒は急に名を呼ばれたことに拍子抜けた様子で振り返った。

「まぁまぁ、サナから言っても悪いことじゃないんだから言ってあげなさいよ」

「というより、何で俺じゃなくてだ…？」

しかしこの発言はスルーされてしまい、彼女は俺に顔を向けた。何か緊張してる様子でもあるが…。

「えっと…橘（たちばな）　勇魚（いさな）です。よろしくお願いします」

「あ、ああよろしく…え？」

た、橘…たちばな……

ダディアナザン！！？

俺は何故かそう思い出してしまった。嘗て仮面ライダーギャレンの変身者、橘（たちばな）　朔也（さくや）と同じ名字だからである。

「あの、何か…？」

「ウェ！？　イア、ナンギィモナイディス！！」

俺は何故かオンドゥル語で言ってしまった。しかしこの言葉が彼女には分からないままで受け流してくれたのは幸いである。

「次は僕かな…秋柳（あきやなぎ）　貴照（たかてる）。よろしく」

「…って、結局俺が最後か…」

最後に1人目の生徒が落ち込む様子でいたが、気を引き締めた後に俺に向かって名乗りでた。

「俺は藤原（ふじわら）　夢路（ゆめじ）。夢路って呼んでくれたらいいよ」

「…じゃあ最後に君の名前でも聞こうかな？」

秋柳は俺に向かって言った。

「…英次。琴芭英次だ」
「琴芭英次君…いい名前ねぇ」
咲は何かしでかそうな顔で俺を見た。ってか、何をする気だ…？
「おい霧島、自分から言ってからかうのはよくないぞ？」
「違う違う、私達の部員にしてみるのも良くないかって思ってるのさ。まぁ、部活に入るならってことでの宣伝のつもりだけどね」
「その部活は？」
俺は咲が言っている部員のことを聞いてみた。
「私や、ここにいるみんなは文芸部の部員でね。まぁそんな大したことじゃないけど、いろいろと講演会で用意したアイディアをプレゼンしてあげてるんだよ」
「へぇ。そりゃすげぇな」
流石に俺でもできたことじゃない。こういうのには慣れない方だからだ。
因みに俺は前まではテニス部に入っているが、まあ普通という感じなのでこれといったことはない。
「ってなわけで英次君、入部しなさいな」
「…えっ！？」
いつの間にか咲に誘われてることになっていた俺。なんだかこの展開、どこかで聞いたことがある気がするけど…。
「俺、前はテニスに…」

「まぁまぁ遠慮せずにさ！そんなに難しいことじゃないし、気合で行けばいいのよ！気合で行けば！」

ああ、これはもう強制執行という奴か。

「…はい、入ります…」
(うわっ、かわいそう…)

夢路は悲惨な俺を見て同情、そして秋柳は本日2度目の一句を読み上げる。

「『誘われ事に、願望むなしく、口塞ぎ』秋柳　貴照」

まさにその通りだ。もはや言える力は何も残されぬままに、俺は文芸部へ入ることとなってしまうのだった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

六花高校へ到着し、夢路達は教室へ入ってから数分で始まった朝礼のときに、俺は始めて夢路達のいる教室へとやってきた。

「あれが転入生かぁ…」
「何かカッコいいよね」
「誰、このイケメン？誰このイケメン？」

…何か得体の知れない人物までいるのは気にしないでおこう。

「今日からこのクラスで世話になる琴芭　英次です。どうぞよろしくお願いします」

とりあえず自己紹介でもしてさっさと席に座ろうかと担任から何処の席に座ってもらうかを待っていると、席は奇遇にも夢路の隣となって席へ潔く座り込んだ。

「これって偶然というより必然だよな？」
「かもな。まぁよろしくな、英次」
「そうだな。よろしくだ、夢路」

こうして俺は六花高校での生活と同時に、魔王の退治するべくの人探しが始まるのであった。
果たしてメリーがこの高校にいるのだろうか…。どうなることかは、次回から話すとしよう。

Ｃｈａｐｔｅｒ０１：電車の中での出会い（後書き）

どうもみなさん。今回は夢路達が電車で登校する場面にちょっとオリジナルを入れた話となりました。
学園生活はある程度出していくつもりなのでありながら、こちら側の設定でまさかのキャラが出たりもしますのでご了承ください（※誰が出るかはお楽しみに）

ここではネタバレなことですが、魔王というだけに夢魔との関係がありません。ではどういうことなのかといいますと、実は別の存在ということなのですがここまで言えないのでカットします。
果たして英次に降りかかるのは奇跡か、ピンチか、そんな彼をこれからもご期待ください。
次回も学園の内容からスタートします！またどうぞ！

追伸：もしちょっと違うよということがあれば報告もお願いします。

Chapter02：能力

授業は習った覚えのあることで調子よく進めて休み時間をとっていた俺だが、勇魚、咲、秋柳が夢路の元へやってきた時に何かを話はじめにでる。

「ねぇ藤原君、今日も”コレ”やってよ。ここんとこ外れ続きだからさ、そろそろバシッと決めてよね」

そう言って咲が左手でレンズの形を作りながら動作をする。
コレってどういうことだ？ってか、何が始まるんだ？

「勇魚、夢路は何を始める気なんだ？」
「あ、英次君は知らないよね。夢路は今夜見る夢の内容を見ることができるの。けどそれが当たるかの保証がないのが痛いんだけどね」

夢の内容を見るだって？おい夢路、お前そんなすごいことができるのか…ってか、保証がないなら意味ない気がするぞ。
そんな俺は不満と期待を背負いながらで夢路を見ていると、気合を入れながら両手でメガネの形を作りながら咲を見つめにでた。
なんともシュールな光景だと思っていたら夢路がその結果を喋り出す。

「赤が7枚…あと緑、わずかに黄色…」

…なんだこれは？結果なのか？
そう思っていると勇魚がノートを取り出して捲り始め、あるページで止まったあとに本当の結果が出たのであった。

「その出現パターンは過去3回。懐かしい人に会う、生野菜を食べる、なぞなぞを解く…」
「…共通点ゼロじゃない！？」
「全部『な』がつくだろうが」

咲が夢路に文句を言うが、言い返された言葉に「そういう問題？」と否定をする彼女を見て俺も同感した。
成程、コイツが当たらないという意味が分かった気がする。
どうせやるなら仮面ライダーライア改め、手塚（てづか）海之（みゆき）のように「俺の予想は当たる」との強い意志を持ちながらやってもらいたいものだな。

「しかし夢路も不思議な特技を持っているよね。こうするだけでその人は今夜見る夢を色で見えるなんて…」
「当たるときは怖いくらいに当たるんだけどなぁ。こないだ魘された時とかさ」
「もう少し的中率が上がるといいんだけどね」
「藤原君じゃあ無理か…」

魘された時？どういう意味なんだ？

「とりあえず霧島、お前の今夜の夢は『納豆の山に埋もれる』で決定だ！」

そう言いながら夢路は廊下へ逃げ去っていく。

「ああ！もう！聞いただけで体がベトベトするでしょ！？」

咲は自分の消しゴムを夢路へ投げつけるが、当たる前にドアを閉めて去って行ってしまうのであった。

しかし何て野郎だ。夢が見えるなんて俺でもあり得ない。
まさかあいつ…

「俺もちょっと見てもらうよ。興味深いからな」
「藤原君に？けど見ての通りに当たるかどうか…」
「遊び心でやりゃ十分だ。じゃ」

俺はそう言って夢路を追いかけにでた。だけど本当は夢を見てもらうことじゃない、本当は彼の能力に興味があるのだ。
もしあいつが、俺と同じ魔皇力の持ち主だとすれば…。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

夢路はトイレの手洗い場で手を洗い終えた後、自分の特技で鏡に映った自分を見ようとしていた。
そうした瞬間に自らの姿が黒くなり、嫌な予感を漂わせながら夢路は悟る。

「…やっぱり今夜も猫の相手か…」

不安を抱いている夢路だが、実はこの能力には秘密があった。
いくら夢見る予想があたらないといえど、悪夢の印である黒いオーラは確実に当たり、夕べの夢路はその猫たちによって悪夢を見ていた。
その時に夢路の見た中では、人間のように2本足で歩きながらなおかつ喋る雄猫に「親分が来る」との予告をして彼が目を覚ますという内容。冗談じゃないだろうが、このオーラがあることには逃れる術

がない。
そう思いながら夢路がトイレから出ようとしたその時、面でこの学校の教師が彼に話しかけてきた。
「どうした藤原、もうすぐ授業始まるぞ？」
「えっ！？メシ島せ…いや、飯島（いいじま）先生！？」
夢路はしまったと焦りながら教師である飯島（いいじま）　良太（りょうた）に返事をした。
が…
「おお、飯は腹いっぱい食えよ…？」
飯島は冷たい一言を言いながらその場を去った。第一印象はいい先生かと思いきや、何か突き刺さりそうな感覚もある教師だ。
夢路は飯島の去っていく場所を見ながら低い声で返事すると、今度は英次が向かい側からやってきた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝

「おっ、いたいた」
俺がトイレを差しかかった時に夢路を見つけ、早速聞きにいこうと彼へ話しかけた。
「夢路、ちょっといいか？」
「ん？何だ？」

夢路は顔を俺に向けて聞きに出る。

「お前、あの特技はいつから身にしたんだ？」

「アレのことか？アレって俺も知らないうちにできたからよく覚えてないけど…いろいろやってたらできたって感じで」

「偶然にもできたってことか？」

「まぁそうだけど…なんでそれを？」

いい質問を着てくれたところで俺はそろそろ本題に行くかと心して彼に質問した。

「夢路。お前まさか…俺と同じ魔皇力の使いか？」

「…え？」

夢路は急に言われたことに目を丸くする。

「分からないならいい。けど、お前がそんなのを使えるのは興味深ったからな」

「そ、そうか？けど、その…『まこうりょく』って何？」

今度は夢路が質問してきた。ここまできたならあれも言うべきだろう…。

「…夢路、実はなんだか俺は秘密がある。誰にも言うなよ？」

「秘密？それって何の…」

「実は俺は…別世界から来た人間、異世界人だ」

俺は彼を落ち着かせながらその真実を話した。俺が仮面ライダーであること以外、魔皇力のこと、そして王である俺の存在やその世界のことを話した時、夢路はその場で立ったままピクリとも動かずに

いた。

「信じられないだろうが、コレが証拠だ」

俺は左手の内を夢路に見せると、手の内からキバの紋様が浮かび上がった。

「王家の紋章だ。俺は生まれつきからある魔皇力を持つ一族の王として、世界を支える存在でもあった」

「そんなことが…人間とは違う怪物と暮らす世界から来たなんて…」

「正式には怪物の名はファンガイア。人間と共存している魔族だ」

いくらなんでもこれを聞けば怖がるだろうとは思うが、夢路にはそんな違和感がなかった。

寧ろ最後まで聞いてくれるだけで幸いだ。

「それと話を変えるが夢路、この学校に…」

【キーンコーン、カーンコーン】

俺はメリーの居場所を聞こうとしたその瞬間にチャイムが鳴った。

「ヤバい！授業始まっちゃう！」

…どうやら言える様子は無いな。仕方なく職員室に訪れて聞くとしようと、俺と夢路はすぐさま教室へ戻るのであった。

＝＝

「ねぇ、まだ？」

「いや待て、もう少しでいいところ見つかるんだけどさ…」

英次達が学校へ構うずっと前。街道を紛れも無いまま行く2つの姿があった。

1つはヘソ出しルックスで紫の髪色と瞳をしており、一風変わった帽子を被っている女の子。見た目からしては何やら態度があるような性格で、もう1つの者へ尋ねていた。

そしてもう1つはこの街にいる人では無く、金色の蝙蝠だ。驚くことにその蝙蝠がなんと喋っており、女の子から何か頼まれ事があるかのように辺りを見ながら飛んでいる。

(うーん…できるなら英次を見つけたいんだけど、ここがどこだか分からないとなりゃあどうしようもないからな…)

蝙蝠はそう思いながら公園の近くへやってきたその時だった。右側に大きめの木を見つけると、女の子がその木を見て立ち止まった。

「あ。あの木なんていいかも」

「え？木か？」

女の子はどうやら気に入った様子でジャンプ。そのまま木を登ってすわり心地のある場所に背を持たれる。

「…うん、これいいかも。ありがと」

女の子は礼を言う。

「いや、結果的にお前が見つけたから役立たずで悪かったけど…」

「寝床があったらそれでいいの。じゃあおやすみ…」

そう言って女の子は何故か眠り始めた。まさかの二度寝か、可笑しすぎる様子だが…。

「…あ。言うまでもないけど、寝てるからと言って噛むのはやめてちょうだい」

「うっ…それは分かってるけどさ。なんていうかつい…」

蝙蝠は落ち込みながら彼女が再び寝る姿を見届けた。

何故子の蝙蝠と女の子がこんなことになったのだろうか。その話をしておきたいところだが、それもまた次回で話したほうがいいだろう。

異界の蝙蝠、キバットバット?世。

夢食いの少女、メリー・ナイトメア。

1匹と1人の出会いの話を次回に…。

Ｃｈａｐｔｅｒ０２：能力（後書き）

はいどうも作者です。
前回に続いて学校から夢路の能力を書かせてもらいました。
けど本当にそうですね、ここで言えば本当に仮面ライダーライアみたいな意味で当たるというのがすごいです。
っていうかこれ、本当に仮面ライダーと相性がいいですね。何せ夢路は特撮ヒーロー好きとの情報があるのですから。（※本当です）

そしてついに出ました！キーキャラクターのメリーとまさかのキバット！次回はこのコンビの出会いということでかなり前をさかのぼります。
どうやって彼らの世界へ来たのか…ということも含め、冒頭辺りは英次側の世界のことを一部だけお話を流します。
皆さん、次回もお楽しみに。

Chapter03：金色蝙蝠／技の男

英次のいる世界。
そして彼の住む城、キャッスルドラン。
英次が別世界へ向かったその頃、朝がやってきた城に住みつく者達は眠気半分な様子で動きに出ていた。
中には早起きして、王である英次に食事を作る優秀な者ねいるが今だに英次が城からいなくなっていることはまだ気づいてはいない。
そんなドタバタな結果が待っている者達の一部始終をこれから少し除いてみるとしよう…。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝

やぁみんな！オレ様は偉大なるキバットバット家三代目の蝙蝠のキバットバット三世、通称キバットだ！
オレ様や使役である仲間達は、かつて世界を支配しようとしていたギル・モナークを懲らしめに人間界から相応しい王を探していたところ、偶然ながら琴芭英次と出会うことなってからキバとして活躍し、オレ様の親父であるキバットバット?世とそのパートナーのソフィードと力を合わせて平和を取り戻したんだぜ？
それ以来からファンガイアと人間と仲良しになって平和が続くことになったんだけど、まさかこんなことになるなんてオレ様も予想外。
それは俺様が起きて英次を起こしに向かった時から始まったんだ。

「おーい、英次～！朝だぞ～！」

英次のいる部屋へ来た見たのはいいんだけど、その時にベッドには英次の姿が無かったんだ。もう起きてるのかとは思うけど、部屋に入った直後には俺の使役モンスターであるバッシャー、英次はレモンと名付けている少女がそこにいた。

「あ、キバットさん。ご主人様を見てませんでしたか？」
「英次を？オレ様はさっき起きて英次を起こしにきたんだけど見てないぞ？」
「そ、そうですか。私も少し気になったんですけど…先輩に聞いてみますです」

レモンは急いで部屋を後にする。
気になったってどういうことだ？早起きしてるのだったらここにいる様子はないはずだとは思うが、オレ様もここにいたはどうかとのことですぐにレモンのあとを追いかけにでた。
そしてやって来たのは居間だ。ここにはレモンの他に、もう1人使役モンスターのドッガ、英次はピーチと名付けている女や、魔法少女の服装をしているウィッチ族のマリン、人間と竜のハーフの姿をしているハーフドラン族のシーラとアリム、手のひらサイズの小さい体をしたホビット族のリリアの5人がいる。

「なぁお前等、英次を見てなかったか？」
「ん？英次か？」

先に反応したのはピーチだ。

「ご主人様がベッドにいなかったので、もう起きてるのかと思ってるんですが…」
「いや、私は見てないぜ？」

「けどそれどういうことでちゅの？もしかして、バカ英次がいなくなったとか言ったり…」

リリアは冗談っぽく言うのだが、これを聞いたアリムがビクリと反応し…

「も、もしかして…マスターは役立たずなアリムを嫌って出て行ったんじゃ…」

「あのね、アイツが優しく接してくれるからと言っても所詮アンタは努力してもムダよ！ムダムダムダ！」

「ちょ、ちょっとシーラ！それってアリムが半人前ってこと！？」

「ううん、一兆分の一人前よ」

ここでハルマゲドンを思い出した奴は気にしちゃダメだぜ？しちゃったら負けだぞ？

因みにだがアリムはドシで炎すら吐けないダメ竜なのだ。

「おいおい、なんかこれって嫌な予感しないか？英次が消えたってことなんだぞ？」

「仰る通りです…」

その時にオレ様の後ろから、別の女の子と、金色の龍がやってきた。

「おお！チェリーにタッちゃんか！」

それは俺の唯一の仲良しであるドラン族のタツロットことタッちゃん。そしてウルフェン族の少女、チェリーだ。

しかし何か気にしている様子でいるような…。

「キバットさん、実はとんでもない事が起きてるんですよ！」

「パステル殿のいる幻想の間にある水晶に、マスターの様子が映されているのです…」

「…え？」

オレ様はどういう意味なのかよく分からなかった。

しかし英次のことを関するのであれば何かがあったということ、なおさらにオレ様達は幻想の間へと向かうのであった。

＝＝＝

幻想の間では光り輝く水晶に移された様子を見ているゴースト族のパステルが、自らの霊力で水晶を操っていた。

そこへ俺様たちもやってきてパステルに話しかける。

「なぁパステル、英次が映ってるって本当か！？」

「………これ、見て…」

チェリー以上の無表情で水晶の様子を見させるパステル。そこにあるのは紛れもない英次が学校へ通っている様子があった。

「学校？英次は学校にいるのか？」

「ですが、マスターの着ている学生服が違います。おそらくは別の学校に通っていると…」

「転校…って、こと？」

「でもどうして？私達に言わないで勝手に転校するはずもないでしょ？」

わけの分からない事だった。パステルは占いも得意だが英次曰く「彼女の占いは必ず当たる」とのことで外したことは一度も無い。これがそう意味するのであれば調べる必要があるのだが、見当もつくはず…

「…あ！英次に電話してみたらどうだ？」

「あ！それいいですね！じゃあ早速電話をしましょう！」

オレ様ナイスアイディア！こういう時には電話して居場所を聞けばいいんだぜ！ってことでレモンが電話のある場所まで来て通話を始める。

【…ツー、ツー、ツー、ツー…】

…が、何故か電話がつながらない。

「あれ？どうしてです？」

「どうかしたか？」

「それが、ご主人様の電話に繋がらないんです。さっき様子が見えたのなら繋がるはずですのに…」

「キバットさん！大変ですよキバットさん！」

このタイミングでタッちゃんが積もるようにしながら話しかけてきた。しかも何か大変な様子だが…

「時空の扉がおかしいんですよ！とにかく来てください！」

「えっ！？なんだって！？」

俺は様はそれを聞いて黙っていられずに向かいにでた。
時空の扉とは、オレ様たちの世界を繋ぐ世界の扉であるが、異変を起こしているのはそれほど大変なことだ。オレ様がそうしてやって来た先には、青く光っている扉の光景が見えている。

「な、なんだよこれ…！？」

開いた口が塞がらずなオレ様の傍に皆もやってきてこの扉を見ていた驚いていた。

「時空の扉が光ってる…？」
「！　…マスターの気配…」

その時にパステルが何かを感じ取った。

「マスター？…もしかして、この扉の向こうにマスターが！？」
「パステル殿の占いと関係すれば、マスターは何かの理由で向かった…そう思える確率は高いでしょう…」
「まさかご主人様が…」

光り続ける扉を見続けていたその時、扉がゆっくりと開き始め、一同は後ろへ下がった。
その時には違和感というのを感じたのか、誰も行くという勇気がなくその場で立ち止まる。
が…

「！？」

突然俺様の体が扉へ引き寄せられていく。ヤバい！と脱出するが、力がどんどん強くなっていく。

「ちょ、おま、タンマタンマ！うわあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！？？」
「キ、キバットさ～～～ん！？」
オレ様はそのまま扉の中へ吸い込まれてしまい、直後に勢いよく閉ざされてしまった。慌ててピーチが開けようとするが…
「おかしいぜ！扉が開かないぞ！？」
「いったい何が起きてるんです！？」
残された者達はざわめいて自身の不安を抱く。英次に続いてオレ様も消えるなんて、想定されたことじゃないものだからな…。

けど、オレ様このまま死んじゃうのか…？
畜生、こうなるんだったら可愛い姉ちゃんを見つけて噛みつきをしたかったのになぁ…。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「ねぇ、ちょっと…」

…あれから１０分もするのか、オレ様の周りに声が聞こえてきた。

なんだよなんだよ、オレ様は死んだのに話しかけて…

【ペチンッ】

「痛てぇっ！？」

オレ様何かに打たれて眼を覚ました。そこは城じゃなく、薄暗く怪しげな袋が散らばった場所。しかもなにか臭さもある。

…いや待てよ、確かさっき女の声が…

「やっと起きた…」

また声がした。今度はまさしく女の声。

ってことは女神様か！？ここは天国ということでオレ様を迎えてくれたのか！？

うぉぉぉいっ！！だったらオレ様は天国で姉ちゃんを見つけまくって幸せになるぜっ！！

って勢いで振り向くと、そこにいたのは女…なのだが女神とかの欠片も無く、逆に悪魔というような感じをした奴だった。

「…なんだなんだ、女神様かと思ったら悪魔かよ！ってことはここは地獄か！？オレ様を連れに…いや待てよ？」

オレ様はそいつの周りをいろんな方向から見まわしてみた。

「…何？」

女はオレ様に問いかけてくる。

「いやいや、君よく見たら世界三大美女に並ぶくらいの噛みつきやすそうなタイプだと思って…いや、待て！！オレ様は変態じゃないからな！？マジで！！」

「？？？」

オレ様はついやってしまったことに立ち直った。オレ様はこういった美人姉ちゃんを見つけるとつい噛みつきたくなるので、英次からは「キバットは変態だ」と言われている。
女はまだ理解していない様子なのでワケの分からないままでよしだ。

「とはいえ…ここ何か臭くねぇか？さっきから変な袋もあるし…」

そんな俺様が裂けている袋を見てみた直後、オレ様はここが何処なのかがすぐにわかった。
ここって…

ゴミ捨て場かよっ！！！

（おい待て！！なんで俺様がこんな下品な場所にいるんだ！？つーかこの女、見た目は派手な割によくここにいたもんだなぁ！？）

ルックスはへそ出しで、ギャルっぽいイメージもあるような感じだけど、彼女には少しだけ違和感も感じていた。
普通ここまで派手にするとすれば、彼女は”オレ様達のいる世界の住人”かと思うからだ。

「ねぇ…」

すると女がオレ様をわしづかみにしながら顔を近づけ、次のことを言うのであった。

「アタシまだ寝足りないから、別の寝床探して…」

「…え？」

ね、寝床？え？なんで寝床？

「あの、何で寝足りないのかって理由…言える？」

そう質問するが女はオレ様へジーッと睨む。なんか嫌な雰囲気がするんですけど…。

「わ、分かった！探す！探してやるから離してくれ！」

そう言って俺様を開放してもらい、女は自分の頭に乗った帽子を被り直す。

「アタシはメリー…メリー・ナイトメアよ。アンタは…？」

「オレ様か？オレ様はキバットバット？世、キバットってよんでくりゃいいぞ！」

「そう…。じゃあキバット、お願い」

いきなりな展開で出会うこととなったこの女、メリーと会うのがこれが初だった。そんなことで俺様がメリーの要望に応えて探して所ところ、公園近くで彼女が寝心地良い気を見つけて睡眠を始めることとなったのである。

しかし英次を探さなきゃいけないだけでなく、ここがどこなのかも全く分からない。オレ様はいったい何がどうなったのかも分からないままだ。

暫くは周りを見回したのだが、ふと俺様は街の様子を見て違和感を感じたのである。

ビルもそんなに建っておらず、どちらかと言えば城下町ともいえる

ような感じの風景だ。しかも、オレ様たちがいる街の空気とは何かが違っている…。

（どういうことなんだ？ここって大阪なのか？）

もし疑うことならちょっと上空まで上がって周りを見てみるとしよう。もしそこに通天閣とかがあるのなら大阪だと言える。

だが、周りに見えたのは普通に建物があるばかりの様子。目印となる通天閣の姿も見えず、オレ様は途端に焦りが出てきた。

（おいおい！まさか、オレ様は大阪じゃないどこかの場所へ来ちまったのか！？）

大阪じゃないのだとすれば、英次もパステルの占いでは大阪ではないどこかの場所へいる…つまりは今オレ様がいるこの街のどこかにいるということだ。

暫くはメリーは寝てるだろうし、１０分くらい離れてても大丈夫だろう。よし、そうとなれば行動だ！

オレ様は英次を探しに、占いであった学校を目指しに飛び立つのであった。

＝＝

「皆さんよろしくお願いします。琴芭英次です」

俺は文芸部の部室へとやってきて、部員の皆に自己紹介をしていた。

夢路、咲、秋柳の他には、顧問とされる教師…夢路が言うには飯島

先生というのだが、彼は食欲の多い教師なので『メシ島先生』というあだ名がつけられている。
そしてこの部活の部長である星野（ほしの）　鳴（めい）も笑顔で俺を迎えてくれるのであった。
…言い忘れているところだったが、勇魚は美術部なのでここでは別活動ということらしい。

「文芸部は初めてでしょうけど、そんな難く考えることは無いので気にせずにしてください」
「は、はい！」

…とりあえずは部員となった俺も緊張してしまう。新しい学校に新しい部活…おっと、新しい世界での生活ということを頭に入れておかなきゃいけなかったっけ。
メリーのことに関しては職員室に向かおうとしていたところで咲が集会とのことですぐに集まることとなり、俺は居場所を聞けないままでいた現在のようになっている。

「…さて、1学期最後の文芸部公表会も迫ってきましたが…担当の藤原君、進み具合はいかがですか？」

星野部長は夢路に問いかけると、何故か夢路は焦り出してしまうのであった。

「ええっ！？ああ…ええっと…そりゃもうバッチリっす、星野部長。アイディアが湧きすぎて、もうどうしたらいいのか…」

うわっ、新人の前にいきなり失態かよ…。
それほど慣れないと苦労することなのだろうかと俺も思うが、これはこれで痛いことだろう。

「それは楽しみですね」
「『どうしたらいいのか…』だけが本音ね」
ごまかしが効いて期待をしている星野部長に対し、咲は攻撃的に突きつけて夢路を追い詰めていく。そしてそこを追い撃ちに秋柳が一句を読み上げた。
「『泣きながら、書けずに謝る、夢の字よ』秋柳貴照…」
「！！　タカ、うるせぇぞ！！」
怒鳴る夢路だが、自業自得でもありながら辛い理由でもある俺はこのことをしっかり覚えておくことにした。
すると飯島先生が一同に近寄って夢路に話しかけてくる。
「藤原は、小説家志望だったよね」
「あ、はい！まだ夢みたいな話ですけど…」
どうも夢路の活動内容は、小説のことらしい。しかしすごいことやってるんだなぁとは思うが、もしかしたら仮面ライダーブレイドで登場している白井（しらい）虎太郎（こたろう）みたいに真実を書いたりもするのだろうか…。
そんな彼を後押しでもしてくれるかのようにしている飯島先生でいるが、直後に立場がひっくり返る一言が口からこぼれるのであった。
「私の夢は、毎日美味しいご飯を腹いっぱい食べることだ」
「…え？腹いっぱい？」
「メシ島先生、それ実現してません？」
俺はそれは夢なのだろうかと疑い、夢路はもうしているじゃないか

というのであるが…。

「ん～…最近、1日米2キロじゃ足りなくてなぁ」

（もしかしてこの人、見た目と裏腹に大食い…？）

俺はそんな飯島先生を唖然としながら見るのであった。無論、夢路達もそんな先生を見て口にすることはできない。

…が、ハッと我に返った時に俺は夢路の志望についてのことを思い出すのであった。

「なぁ夢路。お前は小説を書いているって言うけど、どんなジャンルでだ？」

「ん？そうだなぁ…俺もいろいろと考えたりはするけど…」

夢路が考えている時、咲が俺に耳打ちをしに話しかけてきた。

「実は藤原君ね、特撮ヒーロー好きなんだよ」

「えっ、マジ？」

「あっ、コラ！！今俺の秘密を言ってるな！？」

夢路は先に指を差しながら文句を言う。

「いいじゃないのよ、『フルヘルボーダーグリッチョ』を毎回見てるんだし」

「ふるへ…何それ？」

俺はそんな訳の分からないヒーローを知りに咲へ質問した。

「ああ。藤原君が見てるヒーローだよ。この年でこういうのも面白いことだか…」

「あのなぁ…」

夢路はズタボロにされたかのようにして落ち込む。だが俺は…

「そりゃ奇遇だな。俺もヒーローアニメを見るのが趣味なんだよ」

俺は直球で本音を吐くと、咲に続いて他の皆が「えっ！？」と顔を向く。

「そのヒーローまでは聞いたことないけど、俺は仮面ライダーってヒーローを全て見てきていてね。フィギュアから変身ベルト、そして放送してきた内容を全て録画…俺は隙を越えたマニアという奴なんだよ。だけどこれだけは言うとしよう」

俺は夢路の前まで近づき右型に手を乗せて言うのであった。

「君みたいなヒーロー好きと出会えたことに記念しよう！！ＨＡＰＰＹ　ＢＩＲＴＨＤＡＹ！！」

「え…ちょ、あの…俺は今日、誕生日じゃないんだけど…？」

「これは君への誕生日じゃない。君と出会えた誕生の瞬間を記念する日なのだよ。ヒーロー好き同士が巡り合えるのは限りなく少ないこと…素晴らしいっ！！！！」

「は、はぁ…」

もうここまで来たらとことん止まらない！！と、俺はハッハッハッと笑い続けるが、それを見ていた咲は何か不安な顔で思う。

（もしかして英次君、ハマったら止まることが無いのかな…？）

やっちゃったという感じに咲は止めに出る。

「あのさぁ、一応でいいから落ち着いたほうがいいんじゃないかな？さすがに私達でも分からないことあるしさ…」
「…ハッ、しまった…！」
ヤベぇ、いつの間にか鴻上（こうがみ）会長のマネをしているとは知らずに…というより条件反射でつい言ってしまったではないか。

「すまん！俺、テンションが上がるとあんな感じになってさ…」
「いや大丈夫だけど、本当に藤原君と同じヒーロー好きが他にいるなんてねぇ…」
「僕も意外だね」
「けど面白い部員が入って来てくれて、私は嬉しいわ」
「確かに面白いところもあるね、彼は」
部長や先生、秋柳も認めてはくれた。よかったと俺は一安心して夢路に顔を向ける。

「さっきはすまなかったな。まぁでも、お前にもお前なりなことがあるって分かったんだし、やっぱお前とは気の合う奴かもしれねぇよ。とりあえずは、頑張れって一言を言っとくよ」
「ああ…まぁ、講演会でうまくいくかどうかだけど…」
「俺も少しくらい教えれることなら手伝わせても構わないぜ？」
「そ、そうか？」
「勿論だ。ヒーローも部員も、助け合いだろ？」
その後、俺は夢路が講演会で用いられる原稿の内容からある程度の提案を発案し、彼のプレゼンは大きな進み具合となったのであった。そして部活を終え、いよいよ俺は職員室へとやってくる。

（要るはずだよな。この学校に彼女が…）

いざ前へと職員室の戸を開け、礼儀正しく入室する俺。
そこでは前の高校とは少し違った雰囲気を感じさせる教師たちが整理などをしており、俺は教頭ににでも聞いてみようと、近くの教師に歩み寄った。

「あの、教頭先生はどちらの人なのか教えてはくれませんか？」
「それだったら今ちょうど職員室から出て、体育館前で休息を取っているよ」
「そ、そうですか。ありがとうございます」

英次はすぐさま体育館前へ向かうと、それらしい人物を見かけるのであった。
年齢では５０程度の男。真剣な眼をしている教師へ俺は話しかけにでようとしたが、俺がそうすることができなかった。
何故かというと…

（あの教師って……本郷（ほんごう）　猛（たけし）？）

目の前にいるのはなんと、仮面ライダー１号改めて本郷　猛だったのだ。
いや、まさか…普通にそんな奴がいるのかと思うくらいにあり得ないことだ。人違いというのが現実だけど、こうも都合よくいるのは限りなく少ない。

「あの、教頭先生ですよね？」

とりあえず話しかけると、その声に教頭である男が振り向いた。

「君は…今日転入してきた生徒か。そのとおりだが、何か用かい？」
声を聴いたときに俺は、自然と違和感を感じずにいた。
それが本人と同じような声をしているからだ。
「…えっと、この学校に、『メリー・ナイトメア』って生徒はいないんですか？」
俺は本題を教師に言った。
「ふざけているようなことかもしれませんけど、その生徒に会いたいんですが…」
すると教頭は…
「…残念だが、そう言った生徒は聞いた覚えも、見た覚えもない」
「…え？」
教頭から告げられたのは。そう言ったものはこの学校にはいないということだった。
そんなまさか…。
「あの、名簿に見落としとかはしてませんよね！？何かの間違いとかではないですよね！？」
「いいや、名簿にもそんな名前は無かった」
そんな事実に俺は疑問を抱いた。
どうしてた？アークスは俺を六花高校へ連れて行かせるようにしたのなら、そこに彼女がいるはず…。

（無駄だぜ英次、この学校には彼女はいない…）
「っ！？」

次の瞬間、俺の脳裏にアークスの声が聞こえるのであった。

（俺はお前の心の中にいる。そのため、俺はこうしてお前と会話ができるようになっている）
（それよりもアークス！これはどういうことなんだ！？お前は彼女がここにいるからって教えてくれたために俺に征服を用意して、転入生として迎えさせてくれたんじゃ…）
（フッ…お前はここへ転入させた理由を知っていないだろ？）
（理由だと？）

俺はアークスの語ることをよく聞くことにした。

（お前を六花高校へ入学させたのは、追っ手の者から気付かれないように溶け込ませるための手段だ。最初から彼女がこの学校にいるというわけで連れてきたわけじゃない）
（はぁっ！？じゃあ彼女は何処にいるんだよ！？）
（それができればすぐに言っている。それにお前はそう簡単に動くのは難しい…お前には魔王が取りついているということは、その魔王の手下たちがお前を連れて帰ろうとしているという理由に繋がるからだ）
（手下？まさか俺を…世界を滅ぼす魔王へと覚醒させるために…）
（そういうことだ。だから今はこうして身を隠すしかない…）
（そんな無茶な！！それだったら俺は彼女に会えるのか知ったことじゃない！！）
（かといってむやみに向かえば危険だ。でなければ俺のいる世界…幻界（ゆめ）の世界までも影響が出てしまう）

揉め合う俺とアークスの前に、ふと彼の世界のことを聞いた俺は聞き返した。

（幻界？）
（俺が何者なのかを聞いてはいなかったな？俺は夢魔という幻界の住人だ。そしてまた、メリー・ナイトメアも夢魔の1人でもある）
（夢魔…夢の世界の一族…）

俺はアークスの秘密を知った時、そこで何かあったのかとの考えを思い浮かぶのであった。

（アークス、ということはだが…幻界は何者かに壊滅してしまったのか？）
（生き残りはいるが、それは数日前になる…）

アークスは俺に、幻界で起きたその事実を聞くこととなった。

＝＝＝

数日前、幻界で突如謎の黒い集団が現れた。
まれに異形の姿をした怪物…正しくこの世では到底言えない悪に夢魔は怯え、一瞬にして智赤い血の世界へと変えてしまい、自然は火に焼けて無くなり、その地には鷹と蛇の模様をした旗が立てられることとなっていた。

「聞けっ！この世界の住民どもよ！我々ショッカーはお前達を利用し、その他の世界までも支配する！逆らう者は無論、容赦なく消え

てもらう！」
そして幻界に住みつく夢魔は、生きるために逃げ延びるか、捕まって意のままにコキ使われるかの２つへと分けられてしまい、現在は魔王を探す故に現実の世界へ足を運んでいるらしい…。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

（ショッカーだって！？あの巨大組織、ショッカーがそんなことを…！）
俺は確信した。つまり俺の体に取りついている魔王の正体は、ショッカーの首領ということだと。
（力を封じ込められている状態なら、お前では対抗できる相手なんかではない奴だぞ）
（そんなのは勝手な答えだ！！俺の他にも戦える奴はいるんだから、アイツもつれてくればいいじゃないか！！）
（アイツというのは…？）
（俺の親友、ソフィード・エルリアさ。アイツも俺と同じ仮面ライダー…ショッカーに対抗できる力のある者だ。それにアイツは騎士団も率いてるから、別に方法が無いわけじゃないんだ！）
思えば、彼もここへきているのだとすれば、それで安心できる。
戦う力がほとんどない俺にとって頼もしいことだが…。
（フッ、そんなことか。そいつなら今この世界にいるぞ）

（…えっ！？）

アークスは動じないどころか、彼のことを話すのであった。

（お前1人だけを連れてきたと思っていたのか？近頃の人間は間抜けすぎて欠伸がでるよ…）

（ちょ、ちょっと待て！！何でそれを先に言わないんだよ！？）

（これも俺の考えだ。敵を騙すにはまず味方からってね…）

俺はアークスにハメられまくっていることにガックリと肩を落とした。

こいつはいったい何者なんだ？それに、アークスは何故ソフィードのことまで知っているんだ…？

「君、大丈夫か？」

その時に教頭が俺に話しかけたきた。

どうもアークスの会話が長すぎたせいで疑われているようである。

「す、すみません！なんでもないです！聞きたいのはそれだけなので、失礼します！」

俺は急いでその場から離れることとなった。

あとに残された教頭は、俺の姿が校舎の中へ消えていくときに携帯電話を取り出し、誰かに通話を始める。

「…一文字（いちもんじ）、俺だ。彼と合流したよ。…ああ、それじゃあ」

その時から俺は気づきもしなかったんだろう。

あの教頭が…本当に本郷　猛だったなんて…。

Ｃｈａｐｔｅｒ０３：金色蝙蝠／技の男（後書き）

お久しぶりです。
まさかまさかと、１号と２号が登場するということになりまして、
さらにダークキバも登場します。
ショッカーに関しましては、『レッツゴー仮面ライダー』と内容が
ほぼ同じということであればいいと思います。
特に違うのは…まぁここは秘密です。

そして「始まりを告げる鎖」を見てくださった方には、見慣れない
キャラクターもいますねぇという人のために紹介をしておきます。

◇チェリー
年齢：１５２歳

狼人間を意味するウルフェン族の娘で、現在はファンガイア騎士副
団長に所属。
持ち前の剣を持つだけでなく、いたるところに隠し武器を仕込んで
いることから抜け目のない暗殺者とも思われがちな少女である。
冷静沈着、虚ろな青い瞳の裏には重い過去を背負っていたが、英次
たちの活躍でその苦しさも解放されている。

◇レモン
年齢：１２６歳

人魚を意味するマーメイド族の少女。清らかな歌を持前としており、
心地よい眠りに誘い込ませたりすることができる。
しかし臆病な性格なので怖いことは必ず怖い。だが英次を自分の兄

として受け入れており、キバに変身する彼に大きなサポートをしてあげた経験もある。

◇ピーチ
年齢：１５２歳

フランケンシュタインを意味するフランケン族の少女。見た目は普通の少女でも、ギカント族に圧倒する怪力を持っており、その力ぢょさから性格も男勝り。
とはいえ、自分勝手な所で外をぶらついたりすることがしばしばある。

◇マリン
年齢：１４１歳

魔女の意味をするウィッチ族の少女。元ギル・モナークの差し金だったが、殺されたくなければの為に動かされていたのだが、英次に返り討ちを受けてしまうのだが、英次が彼を新しい仲間として加える。
魔法だけに炎とかを生み出したり、仲間をバリアで守ったりも可能なことから、一流の魔法使いということがわかる。

◇シーラ
年齢：１５２歳

ドラン族とは違い、人間との遺伝を得たハーフドラン族と呼ばれる者の１人。ドラゴンでおなじみのファイアーブレスを吐いて英次を

サポートするが、同族の少女であるアリムとは腐れ縁からたちの悪い性格がある。
英次に対してはあまりコンプレックスが無い。

◇アリム
年齢：１５２歳

シーラと同じハーフドラン族の少女。だが彼女とは逆にドジで炎が吐けないという不幸な体質の持ち主で、役立たずなことからへこみやすいタイプ。
しかし英次のためにと毎日努力をしているようなのだがシーラ曰く「努力しても無駄」ということらしい。
因みにだが、クシャミをするとシーラ以上の炎を吐き出す。

◇リリア
年齢：１５５歳

小人の意味をするホビット族の少女。まれに英次の頭に乗っていたりもする奴で、その理由は彼に悪戯するのが趣味なことらしい。
また、小人だけに「サ行」の言葉はすべて「チャ、チィ、チュ、チェ、チョ」になっている。

◇パステル
年齢：１６２歳

幽霊を意味するゴースト族の少女。真夜中の音楽室で鳴り響くピアノから彼女との出合う意向、英次達の仲間になった。

ピアノを弾くのも彼女の趣味の内だが、彼女の得意なことは占いで、予想は確実にあたる。
チェリー以上に無口。しかも英次には強いコンプレックスがあり、彼の体に取り付いて遊んだりする謎の一面も…。

ということで以上が英次の仲間です。だが私は趣味で書いているわけじゃないんだけど…ただの遊びと思っていてください！
それでは次回もまた会いましょう！

Ｃｈａｐｔｅｒ０４：王の歌声

俺は教頭から場を後にしたあとにこれからの行動を考えた。
できるなら外を歩き回るのも危険ではないかと思うけど、ソフィードのことも気になってしまう。
危険を顧みて向かいに行くか…それとも危険を避けて身を隠し続けるか…。
この行動が後でどういう広がりとなるのかまでは分からないが、その途中で出くわすことになればアウトだ。
俺はこの２つを考えていたその時、誰かが肩を掴まれてしまった拍子に俺は飛び退いて拳を構えた。

「うわぁっ！？ちょっと待って！！私よ私！！」
「…咲！？」

俺の後ろにいたのは咲と秋柳、そして勇魚だった。

「なんだよおい、危うく殴るところだったじゃないか」
「いやでも、そこまで怯える奴じゃないでしょ？どう見ても本気すぎるし…」
「悪い。俺は条件反射でこんな態勢になるから、正当防衛にすぐ入ってしまうんだよ」
「正当防衛ねぇ…それほど君には理由があるのかい？」
秋柳が俺の反応を見て質問してきた。何とも感のいい奴だ…。

「…一応な」
「一応？」
「そう、一応だ。だがその詳しいことまでは教えれないがな……で、

俺に何のようだ？」
３人が俺の所へ来たのなら何か用があるのだろうと、俺は単刀直入で聞きにでた。
「英次君、今後のことは空いてる？」
「…付き合ってやるよ」
俺は即答で返事した。
「いやー、空気の分かる生徒で助かるよ。それじゃあこれからカラオケへ行くとしましょうか！」
（ハァ…どうなることやら…）
俺は即座に危険を顧みる道へと選択することを決めるのであった。
とはいえ、ソフィードを探すの無理だろうな…。
「…そういえばだけど、夢路は？」
思えば夢路の姿が見当たらなかったが、勇魚が言うにはもう帰ったということらしい。
あの野郎！さては抜け駆けしたな！
オンドゥルルラギッタンディスカー！！
…と言っても戻るわけがないのが現実なんだよな。
そういうことで俺達はカラオケを目指しに校舎を出て、校門へとやってくる。
「実際でなんだが、転入だけじゃなくてこの街に来るのが初めてなんだ。できるならどこがどうかってことを教えてくれねぇか？」

「つまり引っ越してきたばかりってことだね？だったら任せなさいな！」

胸を張って偉く見せる咲に苦笑いをする勇魚、それを気にせずとしている秋柳の3人を前に、俺は前の学校の生活を思い出した。
その時に仲が良かったのは、幼稚園から通い続けていた永遠の腐れ縁こと「小笠（おがさ）　睦月（むつき）」。俺はあだ名で「ムッキー」と呼んでおり、テンションの高いボケ野郎みたいな奴だ。
さらにもう1人もいて、その生徒は学級委員長の「上原（うえはら）　千夏（ちなつ）」。元不良生徒でありながら、ファンガイアハンターが集まる組織「素晴らしき青空の会」のエリート会員であり、「仮面ライダーイクサ」との呼び名がある。
そう思えば、千夏はその兄であり、同じくイクサの適合者である「上原（うえはら）　椿（つばき）」と「仮面ライダーレイ」の名を持つ「些哲（さてつ）」も俺の所に来るのだろうか…？
ソフィードにも騎士団長の「レオルド」改め「仮面ライダーサガ」もいるし、多分みんな来てはくれるとは思う。
うん…きっとそうだと思う…。

「…英次君？」

その時勇魚が俺に心配そうな顔で聞いてきた。

「えっ！？何！？」
「うわの空になってたからどうしのかって…」
「そ、そういうことか。悪い、前の学校のことを思い出したんだ」
「転入前の学校だね？」
「ああ。アイツ等は結構面白い奴等でさ、そいつらから突然転校となりゃ凄い落ち込むだろうなって思ったりするんだよ。特に幼稚園からの腐れ縁の奴が」

「確かにそうかもしれないけど、腐れ縁って…」
「男同士の暑苦しい友情ってところかい？それより、早くカラオケにでも行こうじゃないの！」

咲の一言に俺達は動き出した。
それと同時に空の方から何かが飛んでくるのが見えると思いきや、キバットがやってくるのであった。

「この制服…英次が着てた制服と同じだ！ってことはこの学校にいるのか！」

まずは校門にいる生徒を見渡してみるが、それらしい顔をした生徒は見当たらない。
まぁでも無理はないことだ。何せ今英次とたった今すれ入れ違いになったところなのだから…。

「くっそー…こうなれば校舎の中に向かうしかない！」

キバットはすぐさま校舎へ気づかれないよう、裏側から忍び込むのであった。

＝＝

俺は歩いている間に暇をつぶそうと、会話を試みていた。
まずは勇魚に少し聞いてみるとしよう。

「勇魚、夢路とは付き合いは長いのか？」
「えっ、付き合いって…ちょっと！？」
「おお～っ、英次君も藤原君とサナの関係に興味あるんですねぇ」
…いきなりまずいことを言ってしまったようだ。

「違う。恋愛じゃなくて友達の関係としてだ。俺みたいに幼稚園からの知り合いがいるとかのことだよ」
「な、なんだ、そのことね…夢路とは幼馴染なの、私の家に下宿して生活しているから」
「へぇ…それで咲はどうなんだ？夢路との関係とかって」
「これといったことは無いんだけど、夢路のあの特技を期待してることくらいかな？」
「（そういえば「今日もコレやってよ」とかって…）…それじゃあ秋柳、お前は何か俳句を読み上げたりしてるけど趣味でか？」
「僕の方は妹を元気づける為に読んであげてるんだよ。小さい頃は病弱でね、今は回復しているんだ」
「妹…（元気づける、か…）」

そんなことを聞いた俺はレモンのことを思い出した。
別に血のつながりもないし、いわゆる義妹として面倒を見てきた俺…。
始めは臆病で、怖いことには近づきたくない彼女だったが、俺はそんな彼女のために頑張ってたっけ…。
けど、もし俺がショッカーになってしまったらどう思うだろうか…。

「…レモン…」
「ん？レモン？」

その時に咲が反応し、直後に俺が我に返った。

「うわわわっ！？ええっと…レモンジュースが飲みたいなって思ってただけだって！！」

「？？？」

これには咲も気づかないようで危うく回避できた。

くそっ！！俺はどんだけ甘い思いをしてきたんだよっ！？

「…とにかく行くぞ！」

俺は早く着かないかとイラ立ちながらも橋に差し掛かった。

と、その時である。

「…ん？」

ふと俺の周りに違和感が感じられ、その場で立ち止まるのであった。

「どうしたの？」

勇魚が俺に問いかけてくる。

「橋の下に、なんかいた気が…」

俺はそう言って橋の下をのぞいてみた。

綺麗な川が流れて特にこういったことは無いと思いきや、川岸を見た時に俺は目つきを変えてもう一度見てみた。

「イーッ！イーッ！」

前面に骸骨がプリントされた黒いスーツに覆面を身に着けた男の集団が、奇妙な声を上げで何かを行っている。
勇魚達もその場から覗いて暫く見ていると、今度は飛蝗のような仮面に赤いグローブを身に着けた人物までもが現れて黒い集団と格闘を始めるのであった。
どうやらさっきまでのは何かとは戦闘のことであるようだ。

「もしかしてあれ、グリッチョの撮影？新手のヒーローの登場とか…」

咲は夢路の興味あるヒーローの撮影だろうと予想していたが、俺はそうではないと答えた。

「違うぜ咲。アレが俺の言ってた仮面ライダーって奴だよ」
「えっ？アレがそうなの！？」
「しかも最初の時期に登場してた、仮面ライダー2号に…その敵であるショッカー戦闘員。多分それの撮影だろうな…」

俺はそうでありたいと思うが、そう言い切れるものではないと把握している。
あの戦闘員は紛れもない本物で、俺を狙っている奴だ。
でも可笑しい、何故2号がいるのか…ここは初代のいる世界でもあるのだろうかとは思う。

「…つーか2号ってことはだよ、1号の次なんだからそいつがいなきゃどうしたって思うじゃないの」

またもや咲が話に突っかかってきた。

思えば1号の姿が見当たらないような…。

「実は仮面ライダーは2人いるんだ。2号は海外で企んでいるショッカーを倒すために向かった1号が日本側のショッカーを阻止するために活躍した、いわば代役って奴だよ。その後で目的を果たした1号は2号と合流して、ショッカーが壊滅してから新しく変わったゲルショッカーまでも打ち破ったって話になってるんだよ。

…それよりも、早く行った方がいいんじゃないか？満席になったら困るだろ？」

「それもそうね…じゃあ行きましょ」

よし、なんとか気づかれずに進めることができた。

2号がいてくれたおかげで俺達は橋を渡ることができ、その場を何事も無かったかのようにして過ぎ去っていくに対し2号は戦闘員へ止めに入ろうとしているとジャンプ、そして体を回転させながら飛び蹴り態勢をとる。

「ライダァ――、キィィ―クッ！！！！」

お馴染みの必殺技で戦闘員をまとめて撃破した2号は変身を解き、改造人間の名を持つ男「一文字（いちもんじ）　隼人（はやと）」へと姿を変える。

（ここ数日から戦闘員の動く様子もない…寧ろ、俺達に気づかれぬように策略を仕掛けている感じ…。油断しているとマズいぞ！）

一文字は一刻も早く手を打とうとしていると、1つのあることを思い出すのであった。

それは彼がこの端に来る10分前のことである…。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「橋だと？」

街中で座っている2人の男の1人、一文字は言う。

「彼はその橋に来ると言うのか？」

「俺の占いは当たる」

相手は机に置かれたコインを見て、一文字に顔を向けながら言う。

一文字の相手はどうやら占い師のようで、その真剣な顔からは絶対的な自身が込められている。

「しかし会えるのは会えるが、そのタイミングではマズい。ショッカーを目の前まで近づかせる危険を犯してしまう。そうなるとすると、また見失ってしまうことになるだろう…。見えるのはそこまでだ」

「それがお前の占いで出た結果か…。だが、彼に危険が来ているということは確信した。助かるぞ、手塚（てづか）」

「構いない。俺も前はライダーバトルを止めるために仲間と力を貸したこと…そして今このような事が起きていることなら、今度は彼を助けるまでだ」

男は手塚（てづか）海之（みゆき）、またの名を仮面ライダーライア。この場で4人目

の仮面ライダーが確認されることになった状況の中、一文字は彼と別れて占いで出た橋の元へと向かうと、そこへショッカー戦闘員を目撃して今のように至っているのである。

(手塚の占い通りだ。これなら彼は無事に橋を通れるとは思うが…見失うと言うことは、もう既に通ったということなのか…?)

川岸から橋へと登りその場を見回してみるが、気配は何処にもない。一文字の人探しは振出しに戻るのであった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「さて着いたよ。ここは最近オープンしたばかりで有名なんだよ」

学校から歩いて１０分でようやく到着した俺達は、カラオケ店の入り口の前でその看板を見上げていた。

「カラオケ店『ルナ』…な、なんか嫌な予感が…」

俺は聞き覚えありそうな店の名前に苦笑いした。そして店内へ入ると…。

「いらっしゃぁ～いっ!!」

いきなり大声が出たと思いきや、受付の店員（みたいな奴）が体をウネウネと捻らせながら現れた。
勿論俺は…

「出た～～～～～～～～～～～～！！！？？？」

大絶叫する。

「あら貴方、イケメンなのにダイナミックなリアクションをするのね！嫌いじゃないわ！！」

しかし受付が興味津々と化す。
これは俺にとってジェットコースター以上、バイオハザード内に値するほどの危険。
ここはもはやカラオケ店ではなく、地獄の入り口だ。

「４名でフリータイムでお願いしま～す」
「かしこまりました～！」

そう思っていたらいつの間にか咲が話しを進めていた。

「コラ待て！俺を地獄の巣穴へ誘い込ませる気か！？」
「何っているのよ。もしかしてこの人のことがよほど気になってたの？」
「頭からたんこぶが膨れ上がるくらいに気になるって！！」
「失礼しちゃう！でも嫌いじゃないわ！！」

俺は嫌いです！！

「では改めまして、４番席へご案内しま～す！」

そうして俺はこのムサい受付を先頭としてカラオケボックスへと向かい、俺達はその中へ入る。

「それではごゆっくり！あとイケメンな2人（英次と秋柳）には特別にコーラをタダで差し上げておくわ！」

「せ、せめて俺にはレモンジュースを…」

「あら失礼！その要望も嫌いじゃないわ！！」

これはもう歌う前からヤバいかもしれない。

オデノココロバボトボトダ！！

「はい、レモンジュースとコーラお待ちどう～！」

「速っ！？」

落ち込んだ直後にまさかのお届が。瞬間的である。

「ではあらためて、ごゆっくり～！」

そして受付はボックスから去って行った。

ようやく解放されたことに俺はいきなり歌える様子はない。

「…それじゃあ、誰から歌う？」

「私は最後がいいけど…」

「僕は最初は遠慮するつもりでいるよ」

「じゃあ英次君、貴方が最初で決まりよ」

「……少し待ってくれ」

空気を読んでいるというのに咲は空気を読めず、俺はレモンジュースを飲んでのどを潤した後にマイクを手に取りながら気合を入れ始めた。
ちょっぴり期待な様子でいるみたいだが、俺を先頭で歌わせたら最後に後悔してしまうという自信も湧き出てくる。
カラオケはたまに（というかヒーローソング目的で）行くこともあるが、歌っているとなぜか磨きがかかったせいで無駄に美声となってしまったことからこうした自身がつくことになったのである。

「曲はそうだなぁ…これでいいか」

曲名を入力し、俺はマイクのスイッチを入れてスタンバイに出る。
採点機能がスタートし、テレビに映し出されたその曲名には『―Ｉｎｎｏｃｅｎｔ（イノセント）　Ｔｒａｐ（トラップ）』と表示され、綺麗なピアノの音色が鳴り出す。
そしてギターやドラムといった楽器も俺のリズムに合わせるようにして演奏し、俺はＡメロディからの歌詞を歌いだすのであった。

―幼き瞳が見つめる　地上の世界は今、
どんな風に見えているのだろう
見知らぬ恐怖に足を取られて
誰も信じられない、
そんな姿をずっと眺めながら

Ｂｒｅａｔｈｅ　ａ　ｓｉｇｈ？
縛られた考え方　曇らせてゆくよ
強さは弱さを生む　Ｙｏｕ　ｄｏｎ，ｔ　ｒｅａｌｉｚｅ…

研ぎすませ　呼び覚ませ
Ｓｐｅｓｉａｌな感覚
耳を澄まして　聞き取れ
１秒後に起こる未来
力だけに囚われて
自由　忘れた瞬間に
飲み込まれて行くような
もう逃げられないＩｎｎｏｃｅｎｔ　ｔｒａｐ―

…勢いは最後まで続き、歌い終えたその時に３人は唖然としていた。
「英次君…すごく歌上手いんだ…」

さっきの威勢は何処へ行ったのやら、咲はこれを聞いてたまげたと言わんばかりな顔でいる。とはいえ、この美声のせいで、ある日にはアイドルデビューでもするような人気さになった思い出もあったか…。あるいは、恋愛ゲームの世界から現実世界へと来てしまったアイドル女子学生からの告白の時に、歌で返事を返してあげたりもしていたか…。
そんなことから俺は、カラオケは癒し道具と言える存在でもあるモノだと思っている。

でもこんなことして何の意味もないことだが、目的であるメリーは今何処にいるんだろうか…そしていつ会えるんだろうか…？
しかしその物語の歯車は突如噛み合い、動き始めるのであった。

「おーい、上の人…とりあえず人助けと思って、降りてくれないかな？」

現在、夢路は何故か道端の所で倒れており、その体の上には女の子が乗っている。
メリー・ナイトメアと出会った夢路は彼女にそう言うのであった。

Ｃｈａｐｔｅｒ０４：王の歌声（後書き）

おひさしぶりです。作者です。
最初に言っておきますが、この物語はあくまでもキバが主役なので他のライダーはいわゆるサブです。現時点で登場するライダーは少人数制限によってあと２人程度にしておりますのでお楽しみに…。

Ｃｈａｐｔｅｒ０５：デイドリーム　前編

英次達がカラオケに向かおうとしていたその頃。
夢路は一足先に下校して、公園の近くまでやって来ていた。
自宅に帰ってもこれからどうするかと思うけど、講演会でのこともあって整理しておくことを彼は歩きながら考えていた。

【ガサッ】

「ん？」

ふと夢路は頭上に聞こえた音に気付いて上を見上げる。
すると見えたのは白と黒の”何か”が夢路へ落下し、対応できなかった夢路は仰向け状態で下敷きにされてしまうのであった。
しかしそんな重くは無いので潰されるようなことは無かったが、アスファルトの固さと挟まれれば相当痛いと感じたのも束の間だった。
夢路が目をゆっくりとあけてみるとそれは、モノではなく人だ。

それも女の子である。

「いったぁ～…」

女の子は落ちてきた木の上を見上げ、その木から彼女を睨んでいる鴉を睨み返しながら文句を言うのであった。

「ちょっと、あんなに思いっきり突かなくてもいいじゃない！？
何なのよ、朝から安眠妨害して…」

しかしその文句は鴉には聞く耳を持たせてくれず、聞き逃げという
ことで飛び去って行くのであった。
「…何よ、鳥のくせに…」
「おーい、上の人ー…」
そんなカラスを睨み続けていた彼女だが、夢路の声に気付いた後ろ
に向く。
「…とりあえず人助けと思って…降りてくれないかな?」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

女の子がどいてくれたことで起き上がれた夢路は、今でもイラ立っ
ている彼女の様子を見て応えた。
「事情は知らないけどさ、喧嘩友達は選んだ方がいいぜ。鴉には多
分話は通じない」
「…友達なわけないでしょ、あんな鳥類…」
…どうも彼女は『喧嘩友達』の意味が分かってないようだ。よく喧
嘩する相手という意味なのに、彼女は鳥が友達という意味を間違え

ていることからシンプルな勘違いが分かる。
と、そんな矛盾に呆れていた夢路だが、女の子は頭を触ってハッと何かに気付いた。

「あれ！？　帽子、帽子…私の帽子が無い！？」

何やら帽子を探している様子だ。しかしそんな様子からして冷たい感じもしていた女の子は帽子をとったことにより様子が豹変してどこかへ走っていくのであった。
夢路はそんな彼女を呼び止めるつもりでいたが、お構いなく似も彼女は行ってしまう。
やれやれと夢路は彼女を追うのを諦め、自宅に帰ったあとに私服に着替えて外をて歩きまわり、考えをもう一度整理し始める。

（問題は、主人公の驚きをどう表現するかなんだよなぁ…。驚いたとき、人はどういう行動をとるか…）

夢路はこのことに英次のアドバイスのこともふまえて考えた。
英次からは「特に主人公は馬鹿な一面があるとよい」とのことで、リアクションさの調節は元の顔をイメージしてから驚く顔にすると効率が良く、主人公の気の強弱につながるとか…。

（英次の考え方も結構やるもんだなぁ…）

夢路は久寿玉横丁を歩いている途中、目の前に赤いジャケットとズボンを身に着けた男性が夢路に近寄ってくる。

「君、少し話を聞いてもいいか？」
「え？」

夢路は何が何だかわからなかったが、男性はあるモノを度り出して夢路に見せた。

「け…警察？」

なんとそれは警察手帳だった。いわゆる私服警官という奴だろうと夢路は緊張する。

「君は六花高校の生徒か？」

「はい、そうですけど…？」

「なら、琴芭　英次という生徒を見てはいないか？」

何と警察からの内容とは英次のことだった。

「だったら今日俺のクラスに転入してきたんだけど、最後に見たのは部活の時だからそれ以来見てないです」

「そうか…」

「…あ！でも、友達なら見てるかも！携帯で友達に…というよりも、警察どうして英次なんかに用があるんですか？」

夢路は心当たりある人物に聞くことにしていたが、どうも警察のことを気にしていた事で恐る恐ると聞いてみる。

「悪いがその質問は応えれない。すぐにその友達に聞いてみてくれ」

「は、はぁ…」

夢路は携帯電話から勇魚の携帯番号に入力して通話。３秒ほどで勇魚の声が聞こえた。

「勇魚、俺だよ」

「夢路？どうかしたの急に…」
「いやさ、今近くに英次はいる？」
「英次君に？さっきまで私達とカラオケボックスにいたけど、急用で先に帰ったみたいよ」
「え？」

夢路はまた驚いた。この疑惑が膨れて不安へと変わる彼に勇魚との通話を切り、警察に話しかけた。

「あの…その人、さっきまで友達といたんだけど、もうとっくに帰ったって…」
「そうか…分かった。もし彼を見たらコレに連絡してくれ」

警察は自分の携帯番号を見せ、夢路はその番号を自分の携帯電話に記録。警察はそう言い残した後にすぐさまその場から去っていくと、夢路は彼のその姿を見て恐怖の顔へと変わる。

（もしかして英次の奴は犯罪者…？そんな、まさか…）

そう思いたくない彼だがこんなことも思い出す。

『親友は時として悪に変わることがある。それも一つのストーリーだ』

これも英次からのアドバイスだか、今まさにそう起こりつつある状況。正しく、悪へと変貌した英次を想像する夢路は心の中で迷う。

と、その時、夢路の左側の視界には地面を走る白い帽子と、それを追いかけるようにして飛んでいる金色の蝙蝠を目の当たりにするのであった。
始めに帽子を見て驚く夢路だが、蝙蝠を見た時にはそれより少し上の驚きで立ち止まっていると、蝙蝠は帽子に小さい脚で掴んで持ち上げるのであった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

結局オレ様が１０分間学校内を探してみたが何処にもおらず、メリーの元へ戻ってきた時俺様は大ショックを受けた。
なんとメリーがその場にいなかったのである。
（おいおいマジかよ。もう起きて俺様を探してるんじゃあ…）
と、オレ様がガックリと落ち込んで地面を見た時、なんとその視界に白い帽子が走っているのを見かけるのであった。
「ん？あれってメリーの帽子じゃねぇか！　しかも走ってるし…」
オレ様は見失う前に帽子を捕まえようと追いかける。帽子の動きは不規則なうえに、オレ様の小さい脚では捕まえにくい。噛みつくと防止には傷つくだろうからタブーにしているし、とにかく必死で俺

様は帽子を追いかけていた。
そうして俺様は商店街辺りへとやってきた時、ようやく掴むことができた俺様は上へ引き上げ、見事帽子を奪還することに成功した。
「ふぅ〜、危うくアイツが困るところを手助けしてやったんだ。一仕事終えてスッキリ…」
「こ…」
…え？
オレ様は後ろから聞こえた声に振り向くと、そこには人間がいた。しかもこの様子だと…
「蝙蝠が喋った…」
「…ア――――――――――――ッ！！！！」
しまったぁぁぁっ！！オレ様が人前でバレないようにしていたのに、よりによって近くに人がまだいたとは思ってなかった！！
「見、見るな！！そんな目でオレ様を見るな！！オレ様は怪しい奴じゃないんだから見逃してくれ！！」
帽子を降ろして土下座までもするオレ様に、人間が近づく。
「別に俺、気にしたりというか…そんな状況に慣れてるというか…とにかく、俺は何もする気はないよ。ただ、蝙蝠が昼間からいるのは驚いたけど…」
「ほ…本当か？」
オレ様は顔を上げる。

「勿論だよ。よく見るとユニークそうな顔してるから怖いとかって思ったりしないし、」
「そ、そこまで言われ奴って、ムッキーって奴と初めて会ったくらいな感じだな…」
「そ、そうか（ムッキーってあだ名だよね…？）」

オレ様は再び宙へ浮遊して夢路の顔の位置まで来る。

「とりあえずだ人間、オレ様のことは誰にも言わないことを約束してくれたまえ。まぁその代わり、英次って奴には言ってもいいけどな」
「えっ！？英次って…！？」

突然人間の顔が変わった。

「な、なぁ蝙蝠の…えっと…」
「名前言ってなかったか。オレ様はキバット！魔界の住民、魔物と言えば分るだろ！」
「じゃあギハット、英次って、琴芭英次のことだよね！？それどういうことなんだ！？」

何やらこいつは英次を知っていそうだ。

「よし、じゃあオレ様がどういう関係かを説明してやる。その代り、オレ様はお前に英次の居場所を説明してもらうぜ」

そして…

「……なるほど。じゃあ夢路は、英次が今どこにいるかは見当ついていないというわけか」
「そうだよ。けど、あいつが本当に仮面ライダーだったなんて…」
夢路は今でも信じられない事だった。一部は英次からの話で分かっていたものの、更に秘密がある琴には予想していなかったに対し、キバットも少し困った様子になる。
「しかしここが別世界とは驚きだな。それに、1人で勝手に別の世界へ行くなんて、見捨てる奴じゃねぇのによ…」
「ねぇキバット、その話は全部本当だよな？」
「ああ、勿論だ。何せ無二の親友だし」
それほど強いきずなに結ばれたオレ様と英次。今ではどこにいるか分からないうえに、疑問が僅かに残っていることから気が抜けていきそうになっていく。
すると下から猫の鳴き声が聞こえ、夢路と同時に下に向くと、黒い雄猫を目の当たりにするのであった。
（そうか、不規則に走る理由って猫の視界が分からなかったからか…）
走る正体とその理由を理解したオレ様だが、夢路はその猫を見て笑顔になりながら話しかける。
「何処かでお会いしましたっけ？」
一見は冗談っぽくあるようだが、夢路には少し心当たりがあるようだとその場で感じる。

が、その時にオレ様も夢路もこれ以上に無いお退きを招くことになるのは誰も予想できなかった。

「！？」

「んなっ！？」

なんと雄猫が二足歩行で立ち上がったのである。しかも空気が急に怪しい空気へと変わってしまい。

オレ様が急いで周りを見てみるとそこは商店街ではなく、魚の骨などが浮いている荒れた場所へと変わっていた。

「な、なんだ！？何が起きたんだ！？」

どういうことかオレ様も分からない。しかしわかるのはただ１つ、

ここは危（ヤバ）い…！

「…俺は、起きてたはずだよな…久寿玉横丁にいたはずだよな…？」

夢路もこれには驚きを隠せない様子だった。

だがその追い撃ちにと、後ろから猫の鳴き声がして振り向くとなんと猫の大群（全員二足歩行）が経っているではないか。

「何でここにいるんだ！！　どうしてお前等が！？」

「デジャウは夢と器が混ざり合う合図…。ようこそ少年…否、お招きありがとうと言うべきかな…？」

その時にまた別の声が聞こえた。悪魔のような声にオレ様と夢路が

振り向くと、怪しげな仮面に赤いマントを羽織った謎の猫がいた。手にはギロチンのような刃物まで持っている。

「お前、何者だ！？」

あの姿を見てオレ様はファンガイア以上の気配を感じた。数百年前に絶滅した凶悪な魔物『レジェンドルガ』のようなその気配にオレ様は問いかける。

「吾輩の名は追撃者（チェイサー）、ジョン・ドゥ。君達が私達の世界を訪れるように…吾輩も君達の世界に参上奉った」

「何だと？」

オレ様には奴、ジョン・ドゥの意味が分かりにくかった。

「…外に出るためには、器が必要でな。悪いがその体、譲ってはもらえないだろうか…？」

「…！？」

夢路はガシャンと音を立てたギロチンの音に恐怖を浴びる。

「なに、恐れることは無い。しばらく眠っていてもらうだけである。さぁ…」

「っ！！　うあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」

夢路は決死の逃走を始めた。猫たちも一斉に追いかけに向かい、残されたオレ様とジョン・ドゥは互いに睨みあう。

「逃げても無駄だ。チェイサーの二つ名はダテではない…」

「いまいち変わりにくい所もしばしばだが、お前が悪い奴だとは理

解したぜ。ならばここから先は…通行止めと言っとこうか！！」

オレ様は夢路の所まではいかせないと戦うことに決める。

「随分と威勢の良い蝙蝠だな。褒めてやりたいところだが…所詮はチェイサーの敵ではない」

「それはどうかな？オレ様は王家に使える優秀な魔物！オレ様だけでも十分戦えるってことを教えてやるぜ！！」

オレ様は相手の出方を伺うが、その直後に横から赤いバイクが出現してその間に割り込みながら侵入してきた。

ヘルメットを外して素顔が現れたその時に俺様は目を疑う。

「マシンキバー！？　それに、英次！？」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝＝＝

俺はカラオケで盛り上がっている途中、頭にアークスの声が聞こえてくる。

(英次、夢魔の気配だ)

俺はその声に気づいていてアークスに話しかけた。

（夢魔？まさか、メリーか！？）
（いや違う、これは…チェイサー、ジョン・ドゥの気配だ）
（ジョン・ドゥ？別の夢魔ってことか？）
（ああ。しかもアイツ、人間の体を乗っ取ろうとしている。標的はどうやら、お前の知ってる奴だ。ここには今いない奴をチェイサーは…）
（それって夢路？けど、体を乗っ取るって…どういうことだ！？）
（説明している時間は無い。すぐに迎え英次！でなければアイツはとんでもない事になるぞ！）

何やらヤバい空気だ。それに乗っ取りって…まるで俺に魔王が取りついたかのような事じゃないか！！
だとしたら、夢路の魔王みたいになってしまうのか！？大変じゃないか！！

「悪い皆！俺は急用ができたからこれで帰る！」
「えっ！？ちょっと！？」

咲に止められるわけにはいかず、俺は急いで外へと出ると口笛を鳴らして叫んだ。

「来い！マシンキバー！」

その声にマシンキバーが駆け付け、俺はヘルメットを被って搭乗する。

「アークス！どの方向にいけばいいんだ！？」
（俺が指示する。それに従って行け！）
「よし！行くぜマシンキバー！」

マシンキバーはエンジン全開で発進。俺はアークスに従いながら道路を走り、横丁近く待て来た時に周りの様子が変わるのであった。

「！　街の様子が変わった…！？」

「どうやら夢魔が器と接触したようだ。急げ、英次！」

マシンキバーの後ろからいつの間にかアークスが載っており、驚いてバランスを崩しそうになった。

「おとっとっと…いつの間にお前が乗ってるんだ！？」

「これはいわゆる夢の空間だ。この空間にいる間は俺の体が実体化するようになっている。夢魔は本来、現実の世界に入ることはできないのだが、器となる人間に取りつけば現実の世界で留まることが可能になる」

「じゃあ、そのジョン・ドゥは夢路に取りついて現実へ…」

「そういうことだ」

そんな勝手な事、俺が黙ってられるか！

俺は怒りを発しながら進めていると、夢路と怪しげな人物に猫の大群を目の当たりにした。

「あれだ。あの親玉がジョン・ドゥだ」

「あれがチェイサー…ってか、他に蝙蝠もいて…って、あれは…」

あれは…キバット！？

何とキバットが夢路の隣にいるではないか。

「うあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！」

夢路は叫びながら逃走。その直後に子分猫が追跡を始め、キバットとジョン・ドゥが睨みあう。

「あの蝙蝠、まさかあいつと戦う気か？」

「無茶しやがって…！」

俺はアクセルを入れて2人の間に割り込みながらドリフトした。

「マシンキバー！？　それに、英次！？」

キバットが俺を見た応えた。

「よぅ、心配かけたそうだな。それと…」

俺はジョン・ドゥに顔を向ける。

「お前のことはアークスから聞いてるぜ。お前、夢路の体に取りついてアレか？世界征服とかするつもりなのかい？」

「…何者かね？君は…」

ジョン・ドゥは俺に質問してきて、俺は即答で答えた。

「通りすがりの…仮面ライダーだ。キバット、やるぞ」

俺は早速変身して応戦しようとは思っていたが…

「待て英次、忘れてるのか？今変身は無理だと」

「え…？」

俺はアークスに振り向いた。

「言ってただろう、闇属性を利用して魔王を成長させていると…。変身する真似をしたら、また覚醒に近づいてしまう」

「…そうか…（しまった、今できないんだっけ…）」

俺は仕方なく、第2の手段を執行することにした。

首に飾れている剣の形をしたネックレス。それを右手で取って真横へかざすと、金色に輝く剣『魔剣ザンバットソード』が出現して握られる。

「キバット、悪いが事情があって変身できない。できるならお前は、夢路を追ってくれ」

「ハァッ！？なんで変身できないなんて…それよりこいつ（アークス）は誰なんだ！？」

「いいから行け、出なきゃアイツはどうなることやら…」

「殺されると同じことだ。キバット、頼む」

俺はそう言うと、キバットが黙ったままで夢路を追いかけに飛び去った。

アークスも右手に出現する大剣を持ち、ジョン・ドゥに構える。

「久しぶりに会うな、チェイサー」

「確かにそうだな。アークス…」

どうも2人はライバルのような関係らしい。そして俺とアークス、ジョン・ドゥの武器が一斉に動き出した。

まず最初に俺が押し込みに行き、ジョン・ドゥはそれをガード。その時に俺は反動を利用して剣に魔皇力を与え、衝撃波を放ってジョン・ドゥを押し出した。立ち直るジョン・ドゥの前にアークスが振

り下ろしに来るが、右に避けて距離を空けた後に、猫の如くな飛脚でアークスに襲い掛かるものの、アークスは横に大振りで弾き返して攻撃を免れる。

「…腕は落ちていないようだな。しかしそこの少年には驚いたよ。只者ではないという理由がハッキリとしている」

「んなもの、こんなので褒めてもらうのはまだ早いぜ。俺の力まだまだこんなものじゃねぇからな！」

ザンバットソードにつけられているザンバットバットの頭を掴み左右へ素早くスライドして切れ味を増す。

さぁ、第二撃だ！と構えた俺だがその瞬間に、信じられない事が起きるのであった。

「走れーっ！！イナズマーっ！！」

その声と同時に図賞から雷が発生。俺達は慌てて回避すると、その場から映のような怪人が現れた。

「お前は…エイキング！！」

ショッカーの怪人であるエイキングを見た俺はザンバットソードを構え直した。

「ショッカー首領の魂を持つ者よ、そして我々に抵抗する夢魔よ！悪いがここでやられて、我々の元へと来るがよい！　ハァァッ！

！」

そしてまたエイキングが雷を放射して襲い掛かる。

「…アークス、悪いがこの勝負はお預けとする」

「なっ！？お前…！！」

ジョン・ドゥは一足先に離脱してしまった。

「くっ、あいつを捕えに向かったな…！」

「けどその前に、この怪人を早く！」

俺は何とかしてエイキングを倒そうとするが、雷のせいで近寄れない。

だが勝算はあった。俺はアークスのそれを話す。

「…そんなことできるのか！？危険だぞ！？」

「でるんじゃない！！やるんだ！！」

俺はザンバットバットを3回スライドして構えた。

「覚悟はできたか？　できたのなら…死ねぇっ！！！！」

雷が俺達の頭上へと落ちてきた。

「今だアークス！！」

俺の合図で俺とアークスは剣で雷を受け止めにでた。

バリバリバリッ！！！！！

「ぐあああああああっ！！！！」

直撃を受ける俺達は苦しみだす。

しかし…

「ん？…何…！？」

エイキングは目の前で起きていることに驚く。

俺達の剣が雷に吸収され、俺達には直撃されていなかったのである。

「ば、バカな…私の雷を吸収するなど…！！」

「チェックメイトだエイキング、喰らえぇっ！！」

雷をまとったダブル斬撃でエイキングの体を裂き、大爆発が発生して消滅するのであった。

「…よし、あとは夢路だ」

「そうだな。アイツならさっき言ったばかりだから追跡できる。行くぞ！」

俺はアークスと共に夢路を追いかけにでた。

果たして間に合うのか…？

◇後編へ続く◆

Ｃｈａｐｔｅｒ０６：デイドリーム　後編

夢路の体を乗っ取ろうと企んでいた夢魔、ジョン・ドゥとの戦闘の最中に現れたショッカーの手先を撃破した俺とアークスは、急いで追いつこうと行動に出ようとしていた。

「急ぐぞ、このまま彼を失うのはお前にとっては良くないだろう…」

アークスはマシンキバーの元へ向かい、俺はザンバットソードを首飾りに変えてマシンキバーに跨ろうとしたその時だった。右側の地面に落ちていた白い帽子に気づき、それを拾い上げる。

「…なんでこんなところに帽子が…」

「英次、早くしろ！」

アークスは俺に声を掛けるが、帽子を見たその瞬間にマシンキバーの後部座席から降りて俺に近寄った。

「おい。その帽子をどこで…」

「何処って、ついさっき落ちてたんだけど…」

何か心当たりありそうなアークスだが、俺はもしかしてと思って答えた。

「まさか…メリーの帽子？」

「間違いなく彼女の帽子だ。とっておけば近くに来てくれる可能性もある」

何とも好都合なアイテム手に入れた俺は、早速夢路の元へ向かおう

とマシンキバーに今度こそ跨ろうとした。

「あ！私の帽子！」

が、またもや止められたではないか。なんだと思うが、俺はその声で文句が言えずに後ろに振り向く。
紫の髪色をした女の子が１人、そこに立っている。

「…アークス、まさかアイツが…」
「そういうことだ」

俺はついにメリー・ナイトメアを発見した。
確かに目立ちやすい恰好から、まるでマリンと同じウィッチ族の容姿をしている。
俺は彼女に近寄って帽子を差し出した。

「これお前のだろ。だけど渡す代わりにお願いがある」
「…何？」

メリーは俺の質問を聞きに出る。

「しばらくの間、俺に力を貸してもらう。詳しいことは後程説明するが、今は時間なくて向かわなければならない。まずは俺達が向かうところへついて来てくれ」

そう頼んで俺は帽子をメリーへ渡し、メリーは帽子を被り直して機

嫌が良くなったように表情を変える。
「ふぅ、やっぱり帽子が無いと落ち着かないわね」
「…よし。それじゃあ悪者退治を本格的に始めるか…といいたいが、3人そろってバイクに乗るのは無理か…」
バイク3人乗りなんてできるわけがない技だ。だがアークスは、
「先にお前とメリーが行け。あとを俺が追いかける」
「ん？そう？じゃあメリー、これに乗ってくれ」
俺はマシンキバーに跨り、メリーはその後ろに跨りながら俺の方を掴む（というか、この時に乗り方を知らなかったせいでちょっと時間がかかった）。
「しっかりつかまってろ。行くぜ！」
アクセルを入れたマシンキバーは荒ぶる馬の如くに発進。アークスも屋根に飛び移るようにしながら俺とメリーのあとを追いかけに出るのであった。

＝＝

その頃の夢路は、建物の陰に隠れて子分の猫から身を隠しているところだった。
隠れて2分程度はするが、あたりが静かになったことに少しだけ安心したことかとは思うのも束の間、この展開をピンチへと変え仕舞う悲劇が彼の前で現れた。

【カランッ！　カラン、カラン、カラン…】

（いっ…！？）

夢路の前に転がり落ちた缶詰が音を立てる。このままだと気付かれてしまうとすぐに左手で止めたが、フチが人差し指と中指を傷つけて血が出る。
痛みを感じる夢路はさらに自分の頬をつねるがそらも痛いと感じる。

「夢じゃないかのかよ。こんな夢みたいな状況が…」

周りを見るからには、ここは酒場のようで、割れたグラスやビンがたくさん散らばっている。
こんな不気味な場所へ来てしまった夢路には、理想を信じる心さえもない哀れな人間としてこの静かな時間の間に留まらなければならないのかと思われるが、そう上手くいくわけがどこにもなかった。
目の前にあるガラスには夢路が映っているが、次の瞬間にそのガラスから猫の姿が映し出され、夢路は壁にもたれかかる。
その刹那に壁が壊れ、夢路か飛び退くとジョン・ドゥが入ってくるのであった。

「探したぞ少年。さぁ、観念してもらおう…」

ギロチンの刃物を上へあげて構えるジョン・ドゥに怯える夢路。しかしそこへ、キバットが駆け付けにやってくる。

「夢路ーっ！！」

キバットはジョン・ドゥに飛び掛かるが、子分の猫が投げ縄を使ってキバットをうまく捕獲する。

「ぐあっ！？は、離しやがれっ！！」

抵抗するが猫たちに袋叩き状態にあい、ジョン・ドゥはそんなキバットを無視して夢路に顔を向いた。

（お…俺…やらなきゃいけないことがあるのに…）

夢路は後悔するように息を呑む。

「その体、貰い受ける…」

もうダメだ…助からない…。

しかし、そのピンチは時として奇跡を生む。

「ちょっと待ちなよ、悪党野郎」

突然の声に夢路、ジョン・ドゥ、キバットが反応した。

「英次…？」

「それと…メリー！？」

夢路は英次に、キバットはメリーを見て言った。

「よっ、夢路。お待ちかねのヒーロー見参だぜ」

＝＝

なんとか夢路の元へ、そしてジョン・ドゥに追いついた俺はザンバットソードを持ち、メリーの隣に立つ。

「これは驚いたことだな。そこの少年と先程の夢魔だけなく、お主も吾輩の作り出した、吾輩と少年しか入れない空間に入るとは…」

ジョン・ドゥも仮面の下で意外そうな様子を語る。

「現絵の先駆者に敬意を表する…。実態を持たぬ我々が外に出る方法はただ1つ…お主も器を得たのだな？」

「…知らない」

ジョン・ドゥがメリーへ問いかけた質問をメリーは知らないと答える。
それには俺も驚いて顔を向くのであった。
「気づいたらこっちの世界に放り出されていたのよ…。知らない場所…知らない空気…帰り道も帰る方法も分からない…。全く、夢も希望もありゃしないわよ」
「お前…（そういえば、アークスは記憶が無いとかって…）」
俺はこちらの世界に来る前に語っていたアークスの話を思い出す。もしかしたらさっきの話もすべて、メリーの記憶喪失なのだろうか…？
「…なるほど、迷子の仔羊か…」
ジョン・ドゥは鼻で笑うが、メリーはその空気には負けない正義ある顔で言い返す。
「仔羊じゃないわ。アタシはメリー、メリー・ナイトメアよ！」
「…メリー…」
メリーは自らの名を名乗り、その姿を目の当たりにしている夢路は小声で言う。
「ねぇ、せっかくだからアタシを夢の世界に連れて帰ってよ。帰れるんでしょ？」
「何？」
そろそろやるかと俺は気を引き締めていたが、何故かメリーはジョ

ン・ドゥにそんなことを言うのであった。
何のことなのか分からないけど、それで何か不味くない事だろうか…。

「悪いが仔羊、行き先が違う。吾輩は外に出るために来たのだ…」

ジョン・ドゥは夢路に近づこうとするが、メリーはとうせんぼうをして彼を止める。
どかそうと襲い来るジョン・ドゥをメリーはひらりとかわした。

「せっかく見つけたんだもん！意地でも連れて帰ってもらうわ！」
「お、おいおい待てって…ったく…」

俺はそういう暇がなかった。ジョン・ドゥはお構いなしに襲い来かかってくるからである。
ギロチンを振るう瞬間に合わせてメリーはそのギロチンの木製部分を触りつつ、手に力を入れてバネのようにして左側へ下がり、俺は真正面から攻撃を受け止めると同時に、メリーは着地した瞬間からジョン・ドゥへ飛び掛かった。

「フッ！」

俺はバックステップで後ろに下がる。そこへ飛び掛かってきたメリーがジョン・ドゥの腹を持って外へと押し出す。

「ぐっ…！！」

これには多少怯んだジョン・ドゥだが、反撃にと飛び上がりながらメリーの方へギロチンを振り下ろす。
が、

「おっと、そうはいかねぇ！」

あとから来た俺が前に出て、右手を前へ突き出すとキバのマークをした結界が張られて攻撃を弾き返す。そしてその隙を突こうとメリーがジョン・ドゥの腹へ右ストレートパンチを叩きこむ。

（速い…！？）

避けきれないスピードに直撃を受けるジョン・ドゥ。クリーンヒットしてもその一撃は重く、大きな焦りへと繋がる。

「ヘッ。やるじゃねぇか、メリー」

女とはいえど、ここまで強いことに俺は鼻が高かく、俺もザンバートソードに炎を与えて攻撃にでた。

「W直伝、メタルブラディング！！！！」

怒涛の勢いを放った一撃はガードに用いたジョン・ドゥのギロチンを弾き飛ばし、武器を失って無防備と化してしまう。

「どうだ！武器さえなくなればこっちのもんだぜ！」

追い詰めたも同然な俺とメリーだが、ジョン・ドゥはそれでも抵抗する様子だ。

しかし、

「親分がピンチニャ！援護射撃用意！」

そこに猫がバズーカを用意して狙い撃ちを仕掛けてくる。
まだ気づいていない俺とメリーには避けることは無理があるのだが、そこに夢路とキバットが妨害し、バズーカの弾道を俺達から逸らしてくれるのであった。外したバズーカの弾は空に浮く巨大な魚の骨に直撃し、ちょうど俺とメリー、ジョン・ドゥの間に結果して煙が出る。
この時に俺は止めへのチャンスを掴みとり、メリーに話しかけた。

「メリー、そろそろトドメだ。一発かましてやるぞ！」

俺は右足に青い炎が燃えた魔皇力を貯め込み、ジャンプして反転爪先蹴りの態勢をとる。
メリーも続いてジャンプし、踵落としの構えでジョン・ドゥの仮面へと足を勢いよく降ろす。

「ハァァァァッ！！！」
「オラァァァァッ！！！」

俺とメリーの足技は仮面へクリーンヒットし、パリンとその仮面は２つに割れて片方が地面へと落ちる。

「か、勝ったのか…？」

夢路はこの状況を見て様子を伺った。

「そうよ、アタシが勝ったんだからね！そっちの世界へ連れ帰ってもらうわよ！」

メリーはどうしても帰りたい様子だ。とはいえ今帰ったらより危険だし、彼女がいなきゃ大変なことになるとは知らずに…。

「あのさ、メリー。少しだけでもいいから話を聞いてくれないか？でなきゃこっちが大変なことになってさ…」
「何よ！せっかく見つけたのを手放しなさいって言いたいの！？」
うっ。逆に信頼できなくなってきたようだ…。
すると、先程までメリーを見ていたジョン・ドゥが納得するようにして彼女に言うのであった。
「…なるほどなるほど…お主がそうなのか」
「え…？」
ジョン・ドゥはメリーのことを何か覚えがあるようにして言った。恐らくは記憶が消える前の内容だと思うが、このパターンからして何か重要な秘密があるのかもしれないと俺は思う。
「アタシのことを、何か知ってるの…？」
「知らぬよ、お主のことなど…。いやいや、実に興味深い…」
その時に半分に割れた仮面の素顔を見て俺は言葉にできなかった。想像すらできない顔は、俺がメリーを呼び止める力すら消し飛ばしてしまう程である。
そうしてジョン・ドゥは猫達を連れて後ろを向き、立ち去りに出る。
「灯台はただ光るだけではないのか…」
「ちょ、ちょっとなにワケの分かんないこと言って納得してんのよ！！」
メリーはジョン・ドゥへ走ってマントを掴みとろうとしたのだが、体が幽霊のようにすり抜けてしまう。

呼び止めに聞く耳を持たずなジョン・ドゥは、俺達に不敵な笑い声を残して煙の中へと進んでいく。

「あんたっ…！！」

「待てってんだメリー！」

懲りないメリーはまたジョン・ドゥを捕まえようとするが、俺は彼女の左手を掴んで止める。

「離しなさいよ！！せっかく帰れるチャンスなのに！！」

「お前がどういうつもりなのかは知らねぇけど、今は俺と約束してるだろ！忘れたのか！？」

本当なら彼女を連れて帰らせてはいけない。

何せ幻界は今、ショッカーに占領されて大変なことになっていて、メリーがその世界に戻ってしまえば正しく、『飛んで火にいる夏の虫』となってしまう。

「今お前が帰って行ってしまったら、こっちが困ってしまうんだ！手放すとかそんなんじゃなくて、俺は真剣でお前の力を貸してほしいんだよ！」

「…何よ…何でなのよ…帰るなら私も連れて帰ってよ……バカ…」

途端に彼女の顔には涙が浮かび上がっている。

けどそんなに帰りたい気持ちがあっても、これは今現実に起きていること…。メリーが必要だから俺はこうしている。

分かってもらいたいけど、そうはいかないような悲しみをしたメリーは俺へ倒れ掛かり、俺は彼女を受け止めた。

夢路とキバットはその様子を見て俺の元へ駆け寄ろうとしたその瞬間、横丁へと変わって元の場所に戻る。

どうやら空間から抜け出せたようで、夢路の足元には黒猫が1匹いる。無論にも四本足で歩いており、「ニャー」と鳴くとその場から歩き去っていくのである。

「…白昼夢…デイドリームって奴か？」

夢路はこれまで起きたことを悟る。

「…ともかくは夢路、俺達は助かったってわけだよな…」

「そうだね…」

キバットもなんだか安心したようにため息をつく。

が、

「ちょっとアンタ！いい加減にしてよ！」

「待ってくれってメリー！これは事実なんだ！」

夢路とキバットが振り向いた先には、俺とメリーが揉め合いして強いる様子があった。

「いいか、今お前の世界は大変なことになっているんだ！戻っていったら、生きて返してはくれない緊急事態なんだぞ！それに、約束は約束じゃないか！」

「ワケが分からないわよそんなの！私はなんなのか何も分からないのに…なんで…なんで私を止めるのよ！」

その瞬間、俺は彼女の平手打ちを受けてしまう。

まるで彼女に浮気がバレてシバかれているようなこの感覚に、俺は打たれた頬を左手で摩る。

「なんで…なんでよ…」
「…俺は仮面ライダーだからだ」
この痛さに俺は少し黙っていたが、これまでにない真剣さでメリーに説得し始める。
「仮面ライダーは平和を守る正義の戦士。俺は前に人間や、ファンガイアといった異種族の者も守り続けてきた戦士だ。今の俺は夢魔を守らなきゃならない使命がある。当然、お前もだ」
「…？」
気が付けば涙ぐんでいるメリー。彼女は俺の真剣な目を見つづける。
「俺は人間や、他の種族たちと笑顔でいられる世界にするためにいる。だからこそ、お前達夢魔を守る使命があるんだ。それでも分からないなら、これだけは知ってくれ。俺はお前を探しに此処へ来たんだ」
「……」
メリーは何も言わず、そのまま俺の元へ倒れ掛かって意識を失った。説得できたかどうか分からないが、俺は言えることを全て言った。出なきゃ俺は、世界を滅ぼす首領となってしまう…。夢魔も消え、世界はショッカーに支配されてしまう…。
（英次！）
その時、アークスの声が響き渡った。

Ｃｈａｐｔｅｒ０６：デイドリーム　後編（後書き）

お久しぶりです。作者です。
ついにメリーと対面できた英次君ですけど、なぜか意気投合にしているのは私の責任であり、私の出来心だ。でも気にするな。

因みになんですけど、私は彼女と付き合ったことがないためにそんなことは仲ってのですが、母親に平手打ちされた思い出はいくつもありました。
ビンタはドラマシーンの欠片だと思いますｗ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1950s/

夢の世界の王様　～夢食いメリー×仮面ライダーキバ～

2011年10月9日19時49分発行